ふくおか学力アップ推進事業
実践事例集 vol. 3

平成２６年３月
福 岡 県 教 育 委 員 会

はじめに

福岡県教育委員会では、平成１９年度の全国・学力学習状況調査の結果から明らかになった本県の課題である「学力向上推進組織の機能化」「教員の実践的指導力の向上」「学ぶ意欲と基本的な生活習慣・学習習慣の形成」の解決に向け、平成２０年２月に「福岡県学力向上新戦略」を策定しました。

この学力向上新戦略を基にした主要施策として、平成２０年度から「ふくおか学力アップ推進事業」を実施し、県内全体の学力向上や地域間の学力差の解消に努めてまいりました。

本事業の実施により、各地区において、本事例集で紹介している学力向上の推進体制の整備や教員研修の充実、習熟度別指導・補充学習等の個に応じた指導の充実が図られました。このような取組を通して学力向上推進強化市町村では、小学校では全ての教科区分で全国平均との差を縮めるとともに、中学校では、国語Ｂを除く３教科区分で差を縮めています。

本事例集は、このような市町村教育委員会や学校で実施された特徴的な取組を実践事例形式で紹介しています。市町村教育委員会や学校におかれましては、各市町村の学力・学習状況等の実態に応じた学力向上の取組の一層の工夫と推進に役立てていただければ幸いです。

平成２６年３月

福岡県教育委員会

目　　次

■　ふくおか学力アップ推進事業について　1

■　学力向上のための市町村及び学校の推進体制整備　2
・市町村教育委員会における学力向上の推進体制整備【田川市教育員会】　3

・学力向上推進校における学力向上の推進体制整備
【広川町教育委員会（小学校）】　5
・学力向上推進校における学力向上の推進体制整備
【朝倉市教育委員会（中学校）】　7

■　市町村及び学校における教員研修　9
・市町村教育委員会における学力向上のための教員研修【みやこ町教育委員会】　10

・学力向上推進校における学力向上のための校内研修　【福智町教育委員会】　12

■　学校における学力向上の取組
■個に応じた指導の充実を図る習熟度別指導　14
・算数科における習熟度別指導【小竹町教育委員会】　15

・数学科における習熟度別指導【鞍手町教育委員会】　17

■基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導　19
・基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るドリル学習等の指導
【須恵町教育委員会（小学校）】　20

・基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るドリル学習等の指導
【築上町教育委員会（中学校）】　22

■習得した知識・技能を活用する力を育てる学習指導　24
・国語科における習得した知識・技能を活用する力を育てる学習指導
【上毛町教育委員会（小学校）】　25

・数学科における習得した知識・技能を活用する力を育てる学習指導
【飯塚市教育委員会（中学校）】　27

■　放課後の補充学習や土曜日、長期休業中における取組
・放課後の補充学習や土曜日、長期休業中における取組
【直方市教育委員会（放課後）】　29
・放課後の補充学習や土曜日、長期休業中における取組
【桂川町教育委員会（長期休業中）】　31

■　学習習慣形成のための家庭学習の指導　33
・自主学習や学習習慣形成のための家庭学習の指導（小学校）【志免町教育委員会】　34

・自主学習や小中連携等による家庭学習の指導（中学校）【久留米市教育委員会】　36

ふくおか学力アップ推進事業について

ふくおか学力アップ推進事業

■ 事業の目的

「ふくおか学力アップ推進事業」は県下の児童生徒の学力・学習状況を調査分析し、学力向上に有効な施策を提供することで、市町村の実態に即した主体的な学力向上の取組を支援して児童生徒の学力の向上を図るとともに、地域の学力差の是正を図ることを目的として平成２０年度から実施している事業です。

■ 事業内容

1　児童生徒の学力実態の把握と分析

県教育委員会は、県内の児童生徒の学力・学習状況と市町村の学力向上に向けた取組状況を調査分析するために、学力調査を実施し、その結果を分析して報告書にまとめ、市町村教育委員会や学校に提供しています。

2　学力向上推進強化市町村の指定

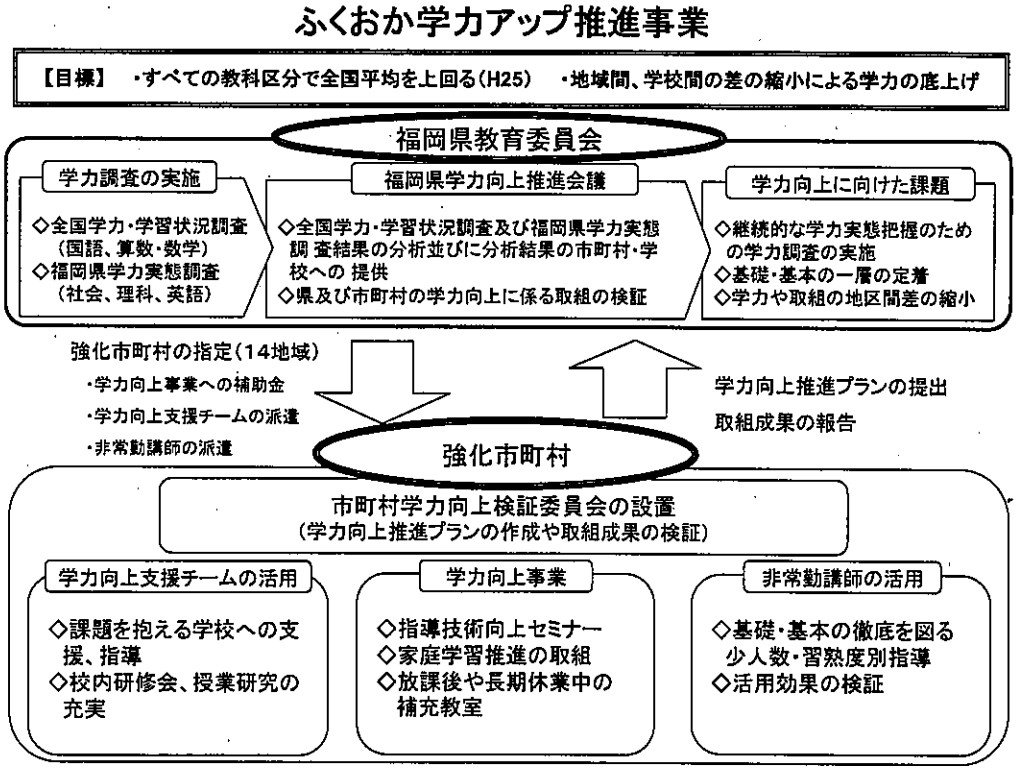
県教育委員会は、学力等に関する課題を明確にし、学力向上に主体的に取り組もうとする市町村のうち、指定を希望する市町村の中から学力向上推進強化市町村（以下「強化市町村」という。）を指定し、次の支援を行っています。

地区	平成25年度学力向上推進強化市町村
福岡	須恵町　志免町
北九州	直方市　小竹町　鞍手町
北筑後	久留米市　朝倉市
南筑後	広川町
筑豊	田川市　飯塚市　福智町　桂川町
京築	みやこ町　築上町　上毛町

◇　非常勤講師の派遣
　児童生徒の実態に応じたきめ細かな指導を充実させ、学力の向上を図ることができるよう強化市町村に非常勤講師を派遣する。
　平成２５年度は、強化市町村全体で５０名の非常勤講師を派遣。

◇　学力向上支援チームの派遣
　教育事務所に設置する学力向上支援チームを強化市町村や学校に派遣し、学力向上の実態分析やそれに基づく推進計画、具体的取組等に関する指導・支援を行う。

◇　強化市町村が実態に応じて独自に行う学力向上の取組について、その経費の２分の１以内の額を予算の範囲内において補助する。



強化市町村の学力向上の取組事例

学力向上のための市町村及び学校の推進体制整備

学力向上のための市町村及び学校の推進体制整備

■　市町村における学力向上の取組を推進する体制整備

図１は、市町村における学力向上の取組を推進する組織の例を示しています。

学力向上の取組を推進するためには、市町村教育委員会の学力向上推進組織を中心に、児童生徒の学力・学習状況に基づく学力向上策を策定し、具体的な学力向上推進計画に基づいて、学力向上の取組を実施し、検証・改善するサイクルを機能させることが重要です。

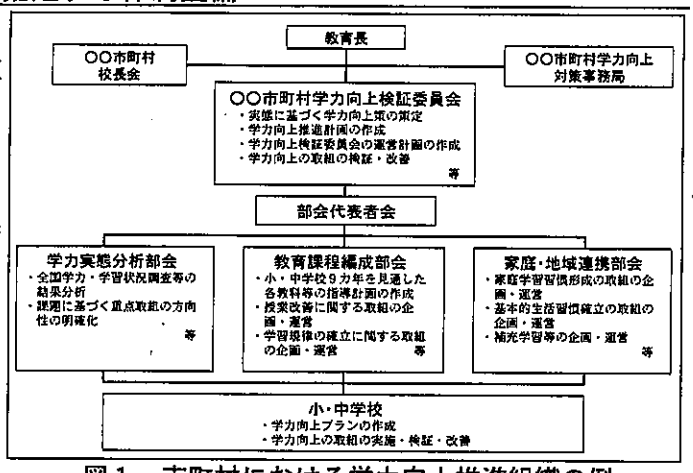


図１　市町村における学力向上推進組織の例

特に、市町村の学力向上検証委員会等の推進組織においては、中期・単年度の学力向上の目標設定を定め、目標達成に向けた学力向上の取組状況を定期的に検証することにより、取組の改善を図る必要があります。

また、学校訪問等を活用して、各学校において市町村の学力向上の重点取組や各校の学力向上プランに基づく学力向上の取組が具体的にどのように実施されているか、その結果児童生徒にどのような変容が見られるか等、各学校の状況を把握したり、今後の取組について指導したりすることも必要です。

■　学校における学力向上の取組を推進する体制整備

図２は、小・中学校における学力向上の推進サイクルの例です。学校においては、校内の学力向上推進組織を核として、自校の学力向上プランに基づき、組織的・計画的に学力向上の取組を実施していくことが必要です。その際、自校の児童生徒の学力・学習状況及び指導の重点について、全教職員で共通理解を図ることは言うまでもありません。

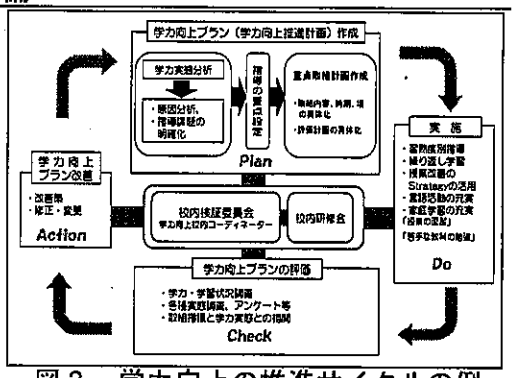


図２　学力向上の推進サイクルの例

また、日常の授業等において学力向上の取組を効果的に行うために、学力向上に関する校内研修を位置付けることも必要です。

図３は、学校における学力向上の取組計画の例です。各学校における学力向上の取組については、年度末だけでなく、学期末など、１年間を通じて定期的に検証することにより、児童生徒の学力の定着状況に応じた指導方法等の改善を図ることができます。

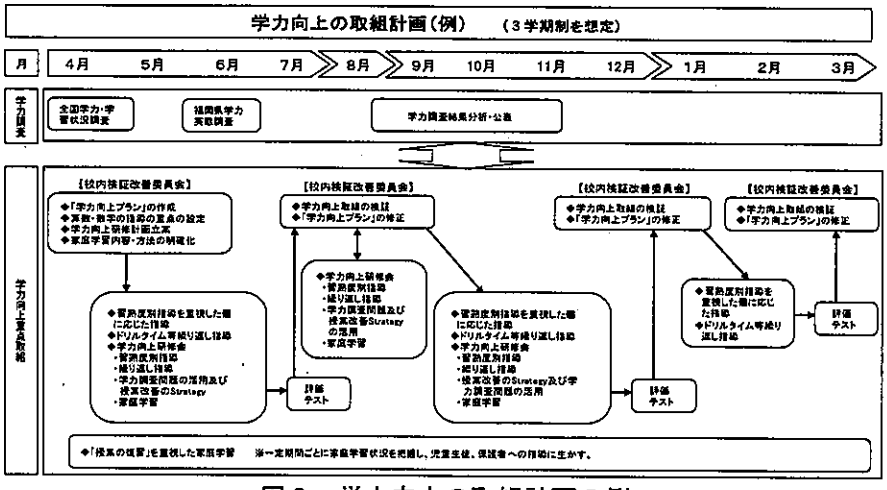


図３　学力向上の取組計画の例

市町村教育委員会における学力向上の推進体制整備
ー　田川市学力向上プロジェクトの取組　ー

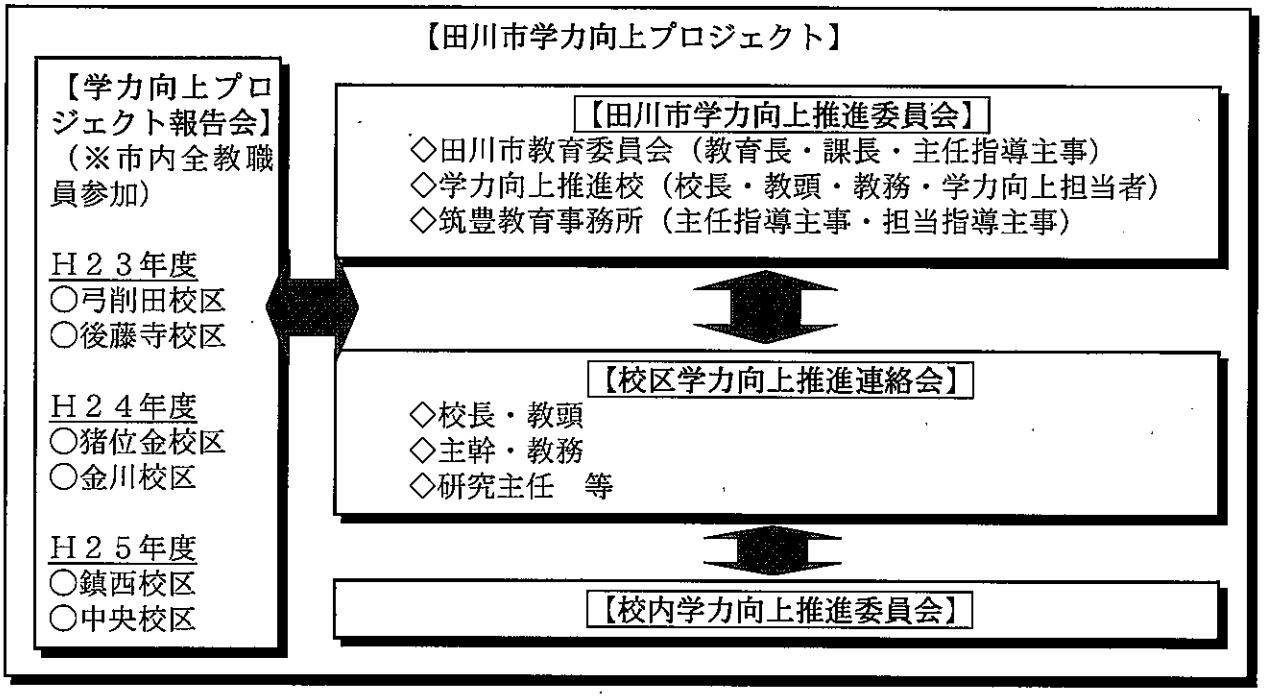
田川市教育委員会

■　取組のねらい

○　校区の小中学校長、学力向上コーディネーター、教務主任、指導主事等が委員となった　「田川市学力向上推進委員会」を開催し、校区内児童生徒の学力状況の把握や学力向上策の検討、評価、改善を行う。

○　市内全教職員参加の報告会を実施し、取組内容の交流を行うことにより、年度毎の積み上げを大切にした市内共通の学びのスタイル確立をめざす。

■　取組の組織



■　取組の年間計画

月	取　組　内　容
４月	関係各校と教育委員会による会議
４月	学力向上推進プランの作成
５月	第１回田川市学力向上推進委員会（連絡会）開催 ○計画についての検討
随時	校区連絡会議［鎮西校区・中央校区毎に随時開催］
８月	第２回田川市学力向上推進委員会開催 ○中間報告及び検討
１０月	１０月１８日（金）鎮西校区学力向上プロジェクト報告会（授業公開・研究発表）
１１月	１１月　７日（木）中央校区学力向上プロジェクト報告会（授業公開・研究発表）
１２月	第３回田川市学力向上推進委員会開催 ○取組の検証・総括
１２月	田川市学力向上（学力実態分析）研修会…管理職・教務・学力向上担当者
１月	ＣＲＴ検査の実施（小１～中２　国・算／数）及び結果の検証
３月	保護者セグメント研修会の実施

■　取組の工夫点

1　田川市学力向上推進委員会
- 　各学校が取組の進捗状況、成果・課題等について、詳細な資料を作成し、プレゼンを行う。
- 　共有した成果と課題について、実践を通してさらなる検証を進め、次回推進委員会で報告したり、次年度の学力向上の計画に反映させたりする。

2　学力向上プロジェクト報告会
- 　昨年度までの成果（H23「価値づくり」、H24「問いづくり」）を踏まえ、「思考づくり」を軸に研究を推進する。
- 　各学校の校内研修計画に板書検討会を位置付ける。

■　取組の実際

平成２３年度【弓削田校区・後藤寺校区】 ↓ ○主眼を達成した子どもの姿の具体化

平成２４年度【猪位金校区・金川校区】 ↓ ○導入時の子どもの問題意識の喚起

平成２５年度【中央校区・鎮西校区】

1　田川市学力向上推進委員会
- 　第１回：昨年度までの成果と課題等を再確認することを通して、事業のねらいに沿って本年度の計画を立案することができた。
- 　第２回：授業改善についての進捗状況を報告することを通して、研究の着眼（視点を明確にした交流活動等）を取り入れた授業を日常的に行い研究主題の具現化を図ること、また、組織的に校内研修を推進すること等について確認し合うことができた。
- 　第３回：「学力向上プロジェクト報告会」の成果と課題を報告することを通して、①「問いづくり」「思考づくり」「価値づくり」の視点に留意した授業を日常的に行うこと、②子どもが一人学びで考えをつくることができるように「材料」「見通し」「フォーマット」を整えること等の効果的な方策を共有することができた。

2　学力向上プロジェクト報告会
- 　各学校の研究の着眼に、「思考づくりの場面における、ねらいを明確にした言語活動」を位置付け、日常的に実践した。「かく活動」で自分の考えをつくり、「話し合う活動」で考えを広げたり深めたりして再構成する学習展開を構築することができた。
- 　各学校が行った板書検討会は従前の指導案審議と比較して、本時の授業イメージを共有することができ、具体的な改善策の検討につながった。また、他教科、他学年の板書に学ぶことができ、授業改善に直結する効果的な校内研修となった。

■　取組の成果と課題

【成果】

○　年間３回の田川市学力向上推進委員会を開催することで、見通しをもった取組と実践に基づいた検証ができ、めあてとまとめのある授業、言語活動を重視した問題解決型の授業スタイルが明確になってきた。

○　全国学力・学習状況調査結果は以下の通り。（県平均との差）
本年度、小学校では全ての教科で過去最小値であり、確実に改善がみられた。

	小学校	国語Ａ	国語Ｂ	算数Ａ	算数Ｂ	中学校	国語Ａ	国語Ｂ	数学Ａ	数学Ｂ
平成２３年度		－6.0	－9.0	－5.7	－8.0		－4.8	－10.3	－8.6	－11.2
平成２４年度		－4.4	－7.8	－3.6	－7.1		－6.3	－8.4	－11.8	－10.8
平成２５年度		－1.2	－2.3	－1.3	－3.2		－7.9	－12.5	－10.3	－8.8

【課題】

●　中学校では、数学Ｂで改善の傾向はみられるものの県との差が依然大きい。授業以外の学習時間を増やすとともに、問題解決型の授業スタイルの浸透と徹底を図る必要がある。

学力向上推進校における学力向上の推進体制整備
－授業づくりプロジェクトと基盤づくりプロジェクトを中核として－

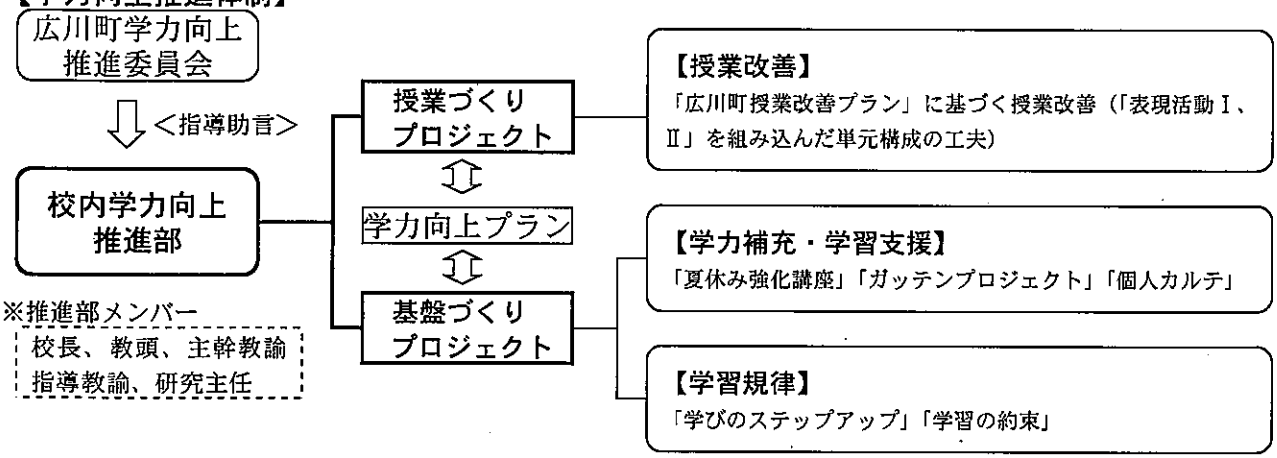
広川町教育委員会（下広川小学校）

■　取組のねらい

○　校内学力向上推進部を中核として、自校の学力向上プランに基づき、全職員の参画のもと組織的・計画的に学力向上の取組を実施する。

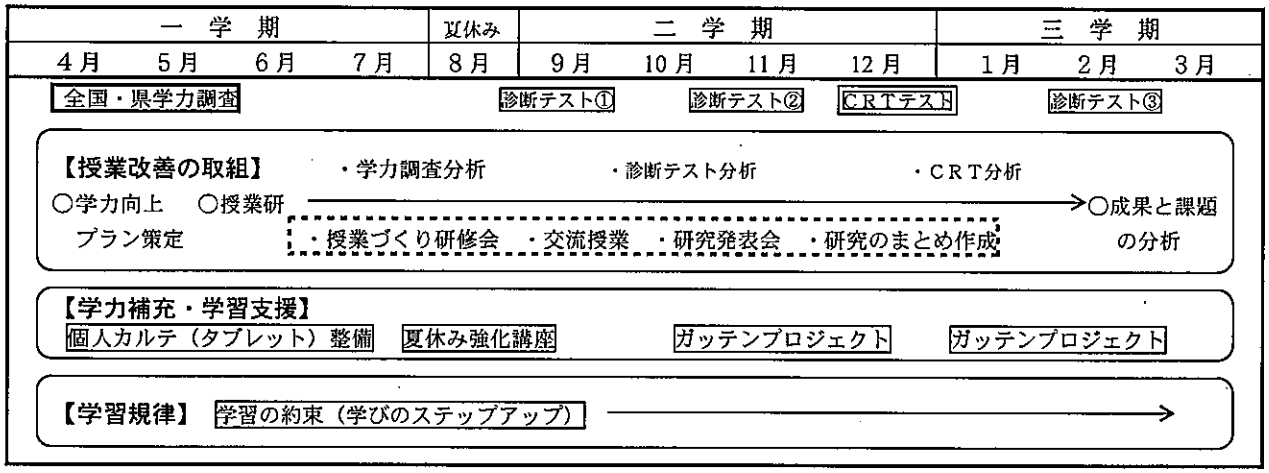
■　取組の組織

【学力向上推進体制】



■　取組の年間計画

学力向上に向けた取組の年間計画（下広川小学校）



■　取組の工夫点

【組織編成の工夫】

○　研究推進委員会が「校内学力向上推進部」を兼ね、校長、教頭の指導の下、主幹教諭、指導教諭、研究主任（学力向上コーディネーター）が連携して、活動を推進する。

○　全職員が「授業づくりプロジェクト」及び「基盤づくりプロジェクト」のどちらかに所属し、全校をあげての学力向上の取組に協働参画できるようにする。

【授業づくりプロジェクトにおける授業改善の取組】

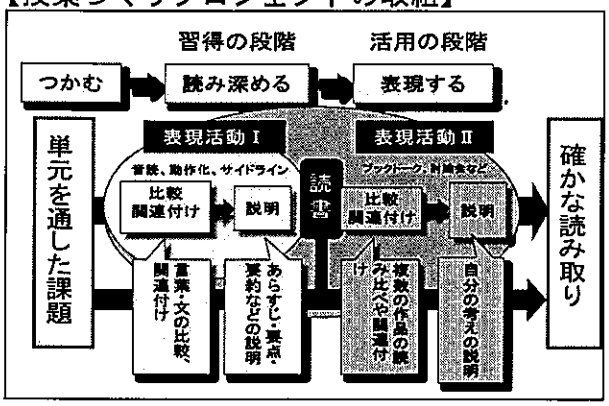
○　授業改善プランに基づき、単元構成に「表現活動Ⅰ・Ⅱ」を位置づけ授業改善を図る。

【基盤づくりプロジェクトにおける学力補充の取組】

○　「夏休み強化講座」や「ガッテンプロジェクト」など学力の補充に努める。また、タブレット端末を活用した「個人カルテ」の導入を図る。

■　取組の実際

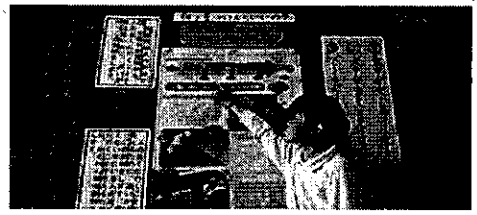
【授業づくりプロジェクトの取組】



資料1　「表現活動Ⅰ・Ⅱ」を生かした単元構成

【授業改善の取組】

○　**授業改善プラン**に基づき、**資料１**のように「表現活動Ⅰ（習得）」と「表現活動Ⅱ（活用）」を位置づけ授業づくりを行った。その結果、「比較・関連付け」と「説明」による学習活動を通して、確かな読みの力を育成できた。（**資料２**）



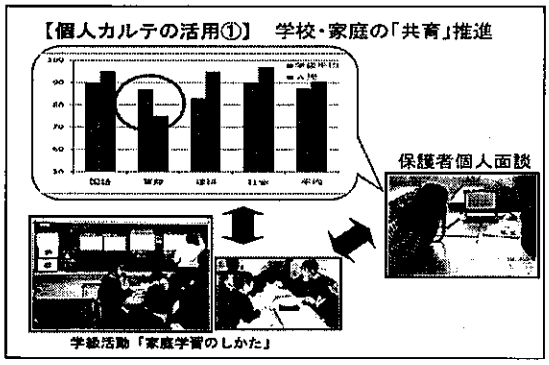
資料２　表現活動Ⅱの様子

【基盤づくりプロジェクトの取組】

[redacted]

日程	朝活	スキルタイム 1校時	スキルタイム 2校時	各学年担当割					
1/10(火)	始業式			1年	2年	3年	4年	5年	6年
/11(水)	習熟度		個人学習	教頭	校長	主幹	○○	○○	○○
/12(木)				内容 ○ 問題集「学年のまとめ」目標3回通り ○ 課題のあるところは、習熟度別にグルーピングして指導 ○ 課題単元は別にプリントを用意して一斉指導も					
/13(金)									
/14(土)									
/15(日)									
/16(月)									
/17(火)				申し合わせ事項 ○ 確実に時間が確保できるよう時間厳守で ○ 担任と担当者が事前に打ち合わせをする					
/18(水)									
/19(木)									

資料３　ガッテンプロジェクト



資料４　個人カルテ（タブレット端末）

【学力補充・学習支援の取組】

○　確かな学力の基盤として、**資料３**に示す**「ガッテンプロジェクト」**と称する課題選択学習を設定し、指導教諭のコーディネートのもと複数教師による指導を実施した。

①　７月末に一学期の復習を中心に行う。
②　１２月末に二学期単元の補充を行う。
③　３月に１年間の総復習を行う。

○　夏休みに算数科を中心に**「夏休み強化講座」**を行い、基礎的基本的な内容の確実な習得を図った。

○　子どもの実態を的確に把握し、個に応じた適切な指導を行うために、**個人カルテシステム**を構築し、その効果的活用を図った。特に、**資料４**のように個人面談において、個人の成績をグラフ化し、一人一人の学習状況を保護者に説明することができた。

【学習規律定着の取組】

○　「基盤づくりプロジェクト」の「学習規律」の係が中心となり、**「学習の約束」**を全校朝会でプレゼンし、今月取り組む学習規律の周知徹底を図った。
　また、取組の成果を校内掲示板（学びのステップアップ）や全校朝会で全校に向けて発信し、学習規律に対する意識化や意欲化を図った。

■　取組の成果と課題

【成果】

○　学力向上推進部が中核となり、全職員の参画による「授業づくり」「基盤づくり」の両プロジェクトを機能させたため、実効性のある学力向上の推進体制を構築することができた。また、学力向上に関して、以下に示す成果があった。

・　表現活動Ⅰ・Ⅱを単元に位置づけ、「比較・関連付け」と「説明」の学習活動を仕組んだことにより「確かな読みの力」を育成することができた。
・　全国学力・学習状況調査や福岡県学力実態調査において、県や全国平均を上回るなど子どもの学力向上について一定の成果が見られた。

【課題】

●　継続的に実施可能な学力向上の取組の充実。
●　学力向上の基盤となる「学びの意欲」や「自尊感情」を大切にした授業改善の取組。

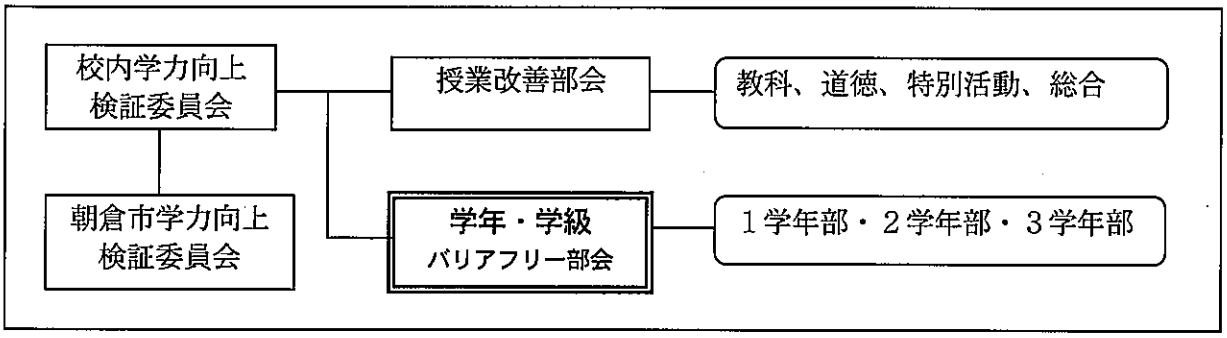
学力向上推進校における学力向上の推進体制整備
－学年・学級バリアフリーの取組を中心に－

朝倉市教育委員会（十文字中学校）

■ 取組のねらい

○ 生徒の学力向上のための組織的指導体制の機能化
○ 生徒理解を深め、指導の個別化・最適化を図る学力補充の工夫

■ 取組の組織



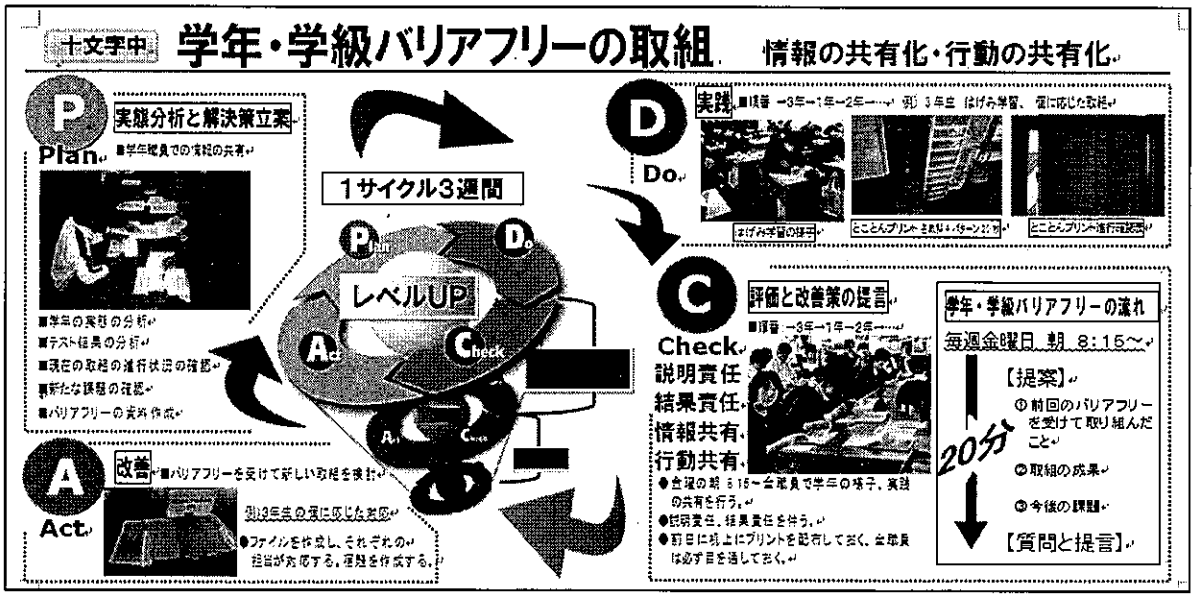
■ 取組の年間計画

○ 授業改善部会・・・・・・・・・・年間を通して、毎週木曜日の放課後に実施
○ 学年・学級バリアフリー部会・・年間を通して、毎週金曜日の朝（２０分間）に実施

■ 取組の工夫点

【授業改善部会】
・授業改善システム（模擬授業→研究授業→授業整理会）による授業研究
・授業評価システム（授業評価指標「ルーブリック」）を活用した授業整理会
・授業改善提携校との交流授業（飛び入り授業、飛び込み授業）

【学年・学級バリアフリー部会】
・各学年３週間を１サイクルとし、学習指導・進路指導・生徒指導の実践を報告・協議
・定期考査や分析テストの結果、各種アンケートや行動の記録等の客観的データの提供
・全職員参加による情報の共有化・行動の共有化を推進し、ＰＤＣＡサイクルを機能化



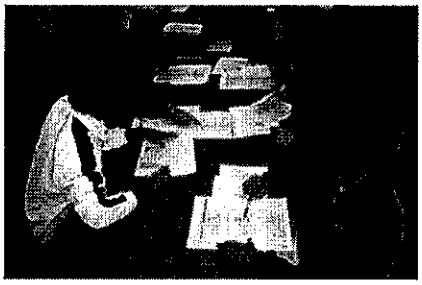
■　取組の実際

○　学年・学級バリアフリーの概要

毎週金曜日の朝礼の時間（２０分間）に、学年や学級の問題をオープン（バリアフリー）にして、様々な角度から課題を解決するためのアイデアを出し合うための協議を行っている。担任や学年だけで問題を抱え込まず、全職員で問題を共有し、チームで解決にあたる取組である。

担当者は事前に、学習や進路、生徒指導について、課題やこれまでの取組をまとめて一覧にした「協議シート」を作成する。学習面や生活面などに課題のある生徒についての「生徒理解シート」なども資料として提示し、これらをもとに全職員で協議を行い、具体的な解決策を確認して共同で解決を図る。３週間を１サイクルとし、ＰＤＣＡサイクルで提案から実践、評価、改善を３週間サイクルで実施していく。

○　具体的な取組



①Ｐｌａｎ　実態分析と解決策立案

②Ｄｏ　実践（放課後のはげみ学習）

③Ｃｈｅｃｋ　評価と改善策の提言

①　Ｐｌａｎ　実態分析と解決策立案

学年会を設定し、「協議シート」を設定する。学習・進路・生徒指導に関する実態分析を行い具体的な解決策を立案する。

②　Ｄｏ　実践（放課後のはげみ学習）

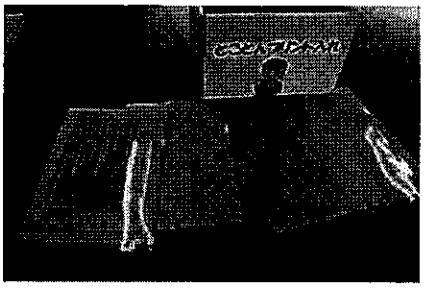
課題解決に向けて実践する。写真は、３年生の補充学習の様子である。習熟度に対応した学習プリントを準備している。

③　Ｃｈｅｃｋ　評価と改善策の提言

取組の成果と課題、新たな取組を提案し、他学年の職員からの質疑と協議を行う。様々な改善策が提案される。

④　Ａｃｔｉｏｎ　改善（とことんプリント）

これまでに提案された改善策を参考にして、試行錯誤しながら作成した習熟度に対応した学習プリントである。完全習得をめざして「とことんプリント」と呼んでいる。家庭学習や勉強合宿の際にも活用している。



④Ａｃｔｉｏｎ　改善（とことんプリント）

■　取組の成果と課題

【成果】

○　学力の基盤となる生徒の学習状況について、学習指導・進路指導・生徒指導に関する課題と具体的解決策を全職員で共有することができ、組織的指導体制が機能化し、生徒の学力が向上した。

第３学年　学力分析テストの結果（数値は、県平均との差）100 点×５教科

H24. 4 (2 年次)	＋１．４	＋１．９	＋４．７	＋５．６	＋６．７	＋２０．３
H25. 9 (3 年次)	＋２．７	＋６．７	＋３．２	＋９．０	＋６．８	＋２８．４
増減	＋１．３	＋４．８	－１．５	＋３．４	＋０．１	＋　８．１

【課題】

●　課外（朝自習、放課後、家庭学習）の学力補充の取組において、教科担当と担任との連携を密に行い、学習内容の選定や確実なチェックを継続的に実施する。

市町村及び学校における教員研修

市町村及び学校における教員研修

■ 市町村における教員研修の状況

県内の８割を越える市町村では、児童生徒の学力を向上させるために教員研修を行っています。また、多くの小・中学校では、授業改善のStrategy及び学力調査問題を活用した研修や家庭学習に関する研修などの教員研修が行われています。

平成25年度市町村における学力向上に関する教員研修の状況

教員の指導力向上のための研修会の開催	84.7%

（平成25年度学力向上推進に関する調査）

本県児童生徒の学力実態から、各教科等においては、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくむことが求められています。そのため、市町村や各学校において、日常の学習指導の充実や学習習慣の形成、学習規律・基本的生活習慣の確立等を図るための教員の指導力を高めることが重要です。

平成25年度小・中学校における学力向上に関する研修の状況

学力向上に関する校内研修の内容	小学校	中学校
・習熟度別指導	65.1%	51.7%
・繰り返し学習	70.0%	54.1%
・家庭学習	79.5%	68.4%
・授業改善のStrategy及び学力調査問題活用	93.0%	81.8%
・学習指導要領の内容	48.6%	41.1%
・学習評価	55.2%	54.5%
・言語活動	63.2%	59.8%
・その他	12.3%	11.0%

（平成25年度学力向上推進に関する調査）

■ 市町村や学校における学力向上に関する教員研修の実施にあたって

学力向上に関する教員研修の実施にあたっては、教員一人一人が児童生徒の学力に関する課題を明確に意識した上で、日常の指導を振り返り、どのように授業改善を図ることが必要であるかを具体的にイメージすることが必要です。また、研修内容が、日常の授業に生かされ、児童生徒の学力や学習意欲の向上につながっているか検証することも大切です。

教員研修の実施のポイント

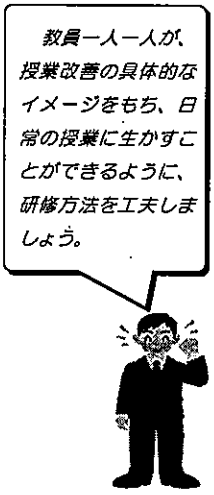
ポイント1

○ 児童生徒の学力・学習状況と教員の指導の状況に基づき、研修内容・方法を焦点化しましょう。

- 研修内容例：学力調査問題の活用、言語活動の充実、学習評価、学習習慣の形成等
- 研修方法例：講話・講義、実践発表、公開授業及び協議会、演習等

※ 必要に応じて、教育事務所や県教育センターの指導主事等に研修内容・方法について助言を求めることも考えられます。

※ １学期に講義、２学期に公開授業など、年間数回にわたって１つの内容の研修を実施することも考えられます。



ポイント2

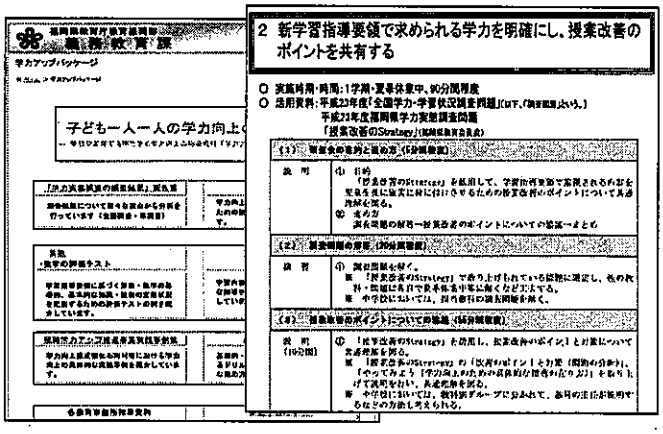
○ 研修内容が日常の授業等の改善に生かされているか状況を把握しましょう。

- 市町村教育委員会においては学校訪問、学校においては管理職等による校内巡視や企画委員会等の機会を通じて、研修内容が日常の授業等の改善に生かされているか、状況を把握するとともに、必要に応じて指導・支援を行うことが必要です。

義務教育課ホームページには、学力向上に関する指導資料「学力アップパッケージ」を掲載し、校内研修の進め方「校内研修モデル」例を示していますので活用してください。

＜掲載内容＞
- 習熟別指導に関する研修
- ドリル学習に関する研修
- 家庭学習習慣形成に関する研修　等

福岡県の学力向上に関する情報満載
「学力アップパッケージ」
学力アップパッケージ　検索



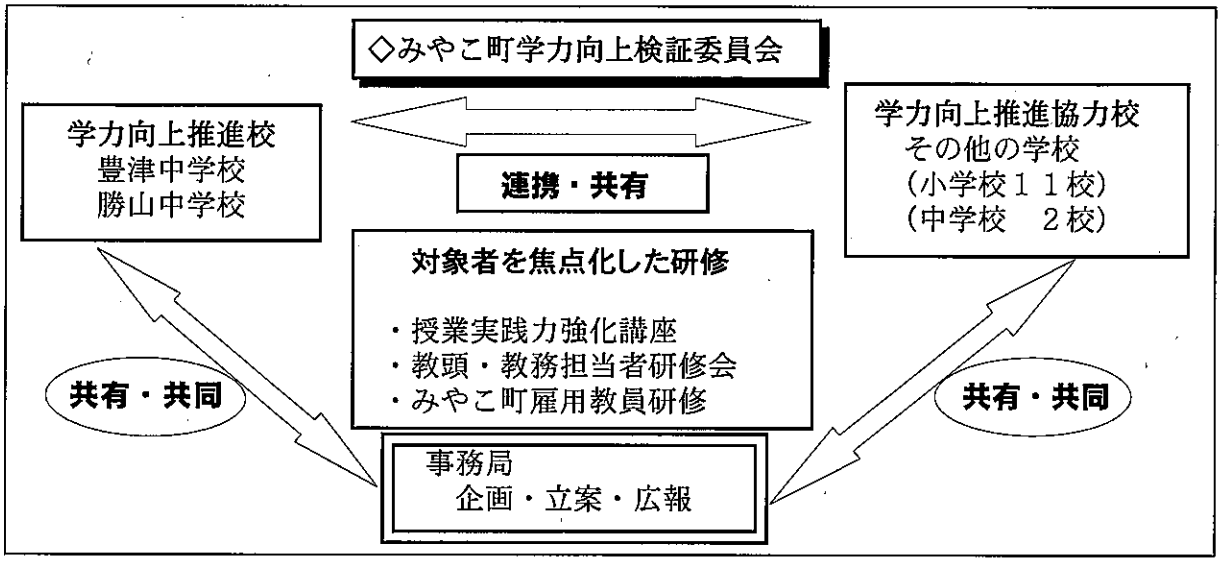
市町村教育委員会における学力向上のための教員研修

みやこ町教育委員会

■　取組のねらい

対象者を焦点化し、ねらいを明確にした研修を行うことにより、みやこ町教員の指導力量の向上を図り、児童生徒に質の高い授業を提供することにより学力向上を目指す。

■　取組の組織



■　取組の年間計画

実施時期	研　修　会　及　び　報　告　会
４月	みやこ町学力向上検証委員会～２月末 みやこ町の学力実態の分析及び学力向上の方策についての企画・立案
５月	平成２５年度の方針の提示（校長会） 第１回教頭・教務担当者研修会
６月	みやこ町雇用教員研修の実施～２月末
８月	第１回学力向上推進校報告会 第１回授業実践力強化講座 （小学校５・６年担任）（中学校国語科・数学科担当）
１１月	みやこ町学力向上検証委員会 第２回授業実践力強化講座　（中学校国語科・数学科担当）
２月	第２回教頭・教務担当者研修会 第２回学力向上推進校報告会 みやこ町学力向上検証委員会（本年度のまとめ）

■　取組の工夫点

みやこ町小中学校児童生徒の学力向上を図ることを目的とし、次の対象者に対しねらいを明確にした研修を実施する。

1　**小学校５・６年担任、中学校国語科・数学科担当**

授業実践力強化講座として、国語科、算数・数学科のよりよい授業づくり及び基礎基本を含む活用力を育成する教材集の活用についての研修を行い、児童生徒に質の高い授業を提供することができるようにする。

2　**教頭・教務担当者**

県や町の教育施策等の情報提供を行ったり、各学校の実践を相互交流させたりして、学力向上に向けた方向性の理解を図る。

3　**みやこ町雇用教員**

授業参観→指導助言→授業改善のＰＤＣＡサイクルをとおして、授業力量の向上を図る。

■　取組の実際

1　授業実践力強化講座

教員の授業力量の向上を目的として、小学校５・６年担任教員及び、中学校・数学科担当教員に対する研修を実施した。

研修内容は以下の通りである。

【第1回目】

○　小学校５・６年担任部会
- 国語・算数の授業づくり
- 全国学力･学習状況調査の問題の分析及び回答

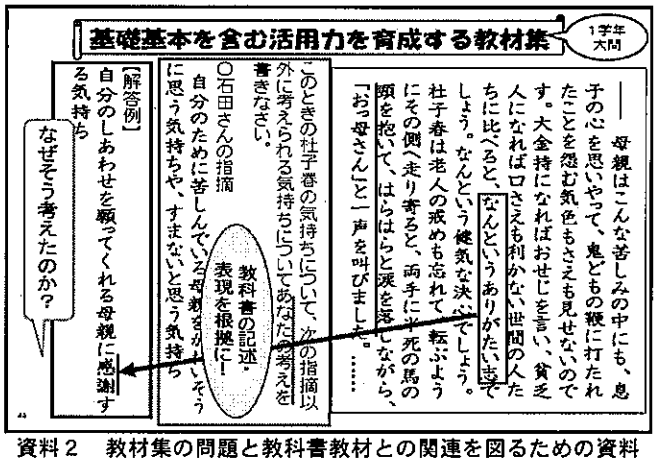
○　中学校国語科担当教員部会（資料１）
- 国語科の授業づくり
- 全国学力学習状況調査の問題の分析及び回答

○　中学校数学科担当教員部会
- 数学科の授業づくり
- 全国学力学習状況調査の問題の分析及び回答

資料１　授業実践力強化講座（中学校国語科）の様子

【第2回目】

○　中学校国語科担当教員部会及び中学校数学科担当教員部会
- 「基礎基本を含む活用力診断テスト」に係る教材集の授業での活用について



基礎基本を含む活用力を育成する教材集

1学年 大問

――母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを怨む気色もさえも見せないのです。大金持になればおせじを言い、貧乏人になればロさえも利かない世間の人たちに比べると、なんという健気な決心でしょう。なんという健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて転ぶようにその側へ走り寄ると、両手に半死の馬の頭を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「おっ母さん」と一声を叫びました。……

このときの杜子春の気持ちについて、次の指摘以外に考えられる気持ちについてあなたの考えを書きなさい。

○石田さんの指摘
自分のために苦しんでいる母親をかわいそうに思う気持ちや、すまないと思う気持ち

教科書の記述・表現を根拠に！

【解答例】
自分のしあわせを願ってくれる母親に感謝する気持ち

なぜそう考えたのか？

資料２　教材集の問題と教科書教材との関連を図るための資料

本研修では、教材集の問題を解き、その後小グループで自分の解答について説明する場を設定した。国語科部会では、資料２の中学校１年生の「傍線部のときの杜子春の気持ちについて考える」問題と教科書教材との関連を考えた。解答例をもとに、採点基準の設定のポイント等について協議した。本文の記述を根拠に説明させることで関連づけて読む力をつけることができることが明らかとなり、教科書教材を用いてこの力を付けていくことの重要性を共通理解することができた（資料２）。このように対象者の焦点化を図り、研修の目的を明確にしたことで、よりよい授業づくりへ向けて質の高い研修を行うことができた。

2　教頭・教務担当者研修会

国の教育をめぐる現状や課題、県や町の教育施策等の情報提供を行ったり、各学校の実践を相互交流させたりした。研修で学んだことを持ち帰り、教育現場で周知を図ることによって、教育の目指すべき姿やみやこ町教育委員会の取組等を町内全体に浸透させることができた。また、研修会にて学力向上に向けて出し合ったアイデアを各学校で還元したことで、日常の授業を見直し、改善して児童生徒によりよい授業を提供することもできた。

3　みやこ町雇用教員研修

みやこ町では本年度１３名の町雇用教員が児童生徒の教科指導に当たっている。昨年度までは研修の機会が少ない実態があったので、授業力量の向上を目的とした研修を実施した。研修は希望する学校長の要請により、月に１回程度授業を参観し、指導するという形態で行った。授業参観→指導助言→授業改善のＰＤＣＡサイクルをとおして、授業力量の向上を図ることができた。

■　取組の成果と課題

【成果】

○　研修対象者が研修の内容を各学校に持ち帰り校内で広めたことによって、学力向上に向けた具体的な実践の推進が図れている。平成２５年１０月学力向上に充てる時間調査では、全ての学校が学力向上に充てる時間を確保している。

○　各学校で、「基礎基本を含む活用力診断テスト」の問題集を教科の指導時間に取り入れたり、問題を解く時間の確保がなされたりしている。

【課題】

●　中学校における教員の学力向上への参画意識を高める工夫。

●　研修を行った教員に必要性や実践の成果を実感させること。

学力向上推進校における学力向上のための校内研修
－確かに学力を向上させるシステムづくり－

福智町教育委員会（金田小学校）

■　取組のねらい

○　確かな学力を向上させるために、校内研修の年間計画を作成する。
○　教師の授業改善を図るために、「人間関係づくり」の授業及び国語と算数の基本的な指導過程に基づいた授業研修を実施する。
○　基礎的･基本的な知識･技能の定着を図るために、モジュール学習を実施する。

■　取組の組織（福智町教育委員会）

福智町教育委員会

←学力向上検証委員会　学力アップ推進校の具体的な取組について話し合う。

町教育力向上推進委員会　教育力向上の具体的な取組の決定
（校長、教務主任）　【重点】・家庭学習の取組　・チェック問題の取組
・生活カードの取組　・土曜授業の取組

各小・中学校研修部等　各学校で取組の推進

■　取組の年間計画（福智町立金田小学校）

5月	6月	7月	10月
8日 「○つけ法」「意味付け復唱法」演習	5日 事前研修（国語2年）	3日 授業研修（算数5年）	16日 事前研修（国語4年）
15日 授業研修（SEL 3年） 福岡教育大学 小泉令三教授招聘	19日 提案授業（国語4年） 下関市立小月小学校 香月正登先生	23日 児童相談所の事業内容と対応例	23日 授業研修（国語4年） 下関市立小月小学校 香月正登先生招聘
21日 授業診断及び講話（算数）愛知教育大学 志水廣教授招聘	26日 授業研修（国語2年）	24日 福岡教育大学 小泉令三教授講話（SEL）	30日 事前研修（SEL6年）
11月	**12･1月**	**2月**	**3月**
7日 授業診断及び提案授業（算数）愛知教育大学 志水廣教授招聘	12/4日 金田小中合同研修会 大阪府教育委員長職務執行代理 小河勝先生招聘	19日 東筑紫短期大学 前川公一准教授招聘（算数）	5，12日 研修計画の見直し
20日 授業研修（SEL6年） 福岡教育大学 小泉令三教授招聘	1/22日 東筑紫短期大学 前川公一准教授招聘（算数）	※学力向上及び主題研修に関する研修のみ抜粋	
27日 授業研修（算数1年）			

※　「SEL（Social and Emotional Learning）」とは、欧米諸国で実践されている、対人能力と自尊感情の育成に重点を置いた学習プログラムである。ここでの「SEL」とは「SEL-8S」のことであり、８つの社会的能力を日本の教育事情に合わせて効果的に育成できるように工夫された学習プログラムのことである。

■　取組の工夫点

1　学力向上コーディネーターの有効活用
2　授業改善を目指した校内研修

■　取組の実際

1　学力向上コーディネーターの有効活用

本校では、モジュール学習を１校時（火・水・木曜日）を１５分ごとに区切り、「読み」「書き」「計算」の学習を行うようにしている。学力向上コーディネーターが推進を図り、学力向上係とともに年間指導計画を作成し（資料１）、各学級で取組を進めている。モジュール学習は昨年度より取組を進めていたが、本年度より年間指導計画等の見直しを図り、取組が充実している。年間指導計画の見直しの観点は以下の通りである。

○　子どもにモジュール学習の成果を発表する場等の設定
　→学習発表会、漢字検定の実施
○　モジュール学習のゴールの明確化
　→漢字前倒し学習の実施、チェックテスト等の実施
○　学力向上コーディネーターの活用
　→ショートタイムのモジュール学習研修の実施、各教室での模範授業等の実施
○　モジュール授業の活性化
　→音読の仕方の工夫、フラッシュカード等の活用、プリント作成

	１０月２・３週	１１月１・２週
読み	山頂から(漢4)	学習発表会用 音読練習
	都道府県(フラ)	
	熟語(国下)(プ)	都道府県(フラ)
書き	漢字前倒し(2週連)	コメンテーターに挑戦:技能(作)
	都道府県(プリ)	「絵を見てお話を書こう」
	再チャレンジテスト	都道府県(プリ)
計算	小数のひき算(音声)	垂直・平行と四角形(プ)
	あまりのあるわり算(音声)	わり算の筆算(プ)
	チェックテスト	チェックテスト
	１０月４・５週	１１月３週
読み	学習発表会用 音読練習 竹取物語	ぎんなんの木(漢4)
	リンゴとポンカン(漢4)	こうしていう(漢4)

資料１　４年生年間指導計画（抜粋）

2　授業改善を目指した校内研修

基礎的･基本的な知識･技能については、モジュール学習で脳の活性化を図りながら、繰り返し学習を行うことで習得を目指している。思考力・判断力・表現力等の育成は授業で行わなければならい。そのために、年間を通して外部講師を招聘し授業診断や模擬授業・授業研究での指導助言、講話等を行ってもらえるように校内研修年間計画を４月当初より立てて実施している。また、組織的に学力を向上させるために、国語（「読むこと」の領域）と算数では基本的な指導過程（資料２）を作成している。両教科とも思考したことを表現させるために、記録、説明、図解、立式、記述等の言語活動を明確にするようにしている。そのことをもとに、自力解決を図り、その考えを交流して深めるようにしている。更に、国語では自分の考えをまとめること、算数では適用問題を解く時間を確保することにより、学習の定着を図るようにしている。

また、国語と算数では、全校でノート指導も統一している。国語と算数で共通しているのは次の通りである。

①　日付、単元名を書こう。
②　めあてを書こう。
③　１マスに１字書こう。
④　正しく文字を書こう。
⑤　線を引くときは、定規を使おう。
⑥　自分の考えを書こう。
　（感想、ふりかえり、賛成・反対、理由、根拠、結論、疑問、わかったこと、など）

	主な学習活動	指導上の留意点
導入	1. めあてを確かめる。（2分）	・学習計画をもとに、めあてを確かめさせる
	2. 見通しをもつ。(3分)	・何をどのように学習するのか、学習に見通しをもたせる。(内容と方法)
展開	3. 課題に対する自分の考えをノートなどに書く。（15分）	・どんな言語活動をするのか明確にしておく。 （記録・説明・報告・紹介・感想・討論・図解・要約など） ・理由や問いに対する答えなど自分の考えを書くようにする。(書く活動) ・よくできているところに○をつけ、自信をもたせる。 ○つけ法 ・机間指導により、児童の実態を把握し、次の交流へとつなげる。
	4. 考えを交流して深める。（15分）	・自分の考えと友だちの考えの共通点や相違点などに視点をあてて交流する。 ・友だちの考えを聞いて、自分の考えの深まりを明らかにさせる。 反復法
	5. 自分の考えをまとめる。（5分）	・低学年においては、教師主導のまとめでもよい。 ・学年が上がるにつれ、自分の言葉で書けるようにする。(中・高学年)
終末	6. 振り返りをする。(3分)	・学習の内容と方法について、振り返りを行わせる。
	7. 次時の学習を確かめる。（2分）	・次時の学習への意欲づけを図る。

資料２　国語科の授業の基本

■　取組の成果と課題

【成果】
○　モジュール学習で繰り返し学習等を行うことにより、基礎的･基本的な知識･技能の習得ができている。
○　基本的な指導過程及び統一したノート指導を行うことにより、組織的な授業改善につながっている。

【課題】
●　子どもの実態に応じたモジュール学習の年間指導計画の見直しと、教材の開発。

学校における学力向上の取組

個に応じた指導の充実を図る習熟度別指導

■　本県における習熟度別指導の状況

本県では、９割を越える小・中学校が習熟度別指導を行っています。習熟度別指導は、習熟の程度が同程度の児童生徒を小集団に編成するため、それぞれの集団に応じた指導方法や内容を工夫することによって、より効率よく、きめ細かな指導が可能となります。

習熟度別指導の実施状況

小学校	94.3%
中学校	91.9%

（H24年度教育課程実施状況調査）

平成24年度指導方法工夫改善に伴う教員配置校実施報告書においては、習熟度別指導等、個に応じた指導の実施により、ほとんどの小・中学校において、児童生徒の「知識が定着し理解が深まった」「学習意欲が高まった」という回答をしています。

習熟度別指導等、きめ細かな指導による効果

項　　目	小学校	中学校
児童生徒の意欲が高まった	99.1%	99.0%
思考力・判断力・表現力が高まった	89.5%	86.1%
教科等に関する技能が身についた	97.3%	93.8%
知識が定着し理解が深まった	95.8%	96.9%

（H24指導方法工夫改善に伴う教員配置校実施報告書）

■　習熟度別指導の実施にあたって

習熟度別指導は、児童生徒の学力実態に基づいて、指導内容を重点化するとともに、学力の程度に応じた指導方法を明確にした指導計画を作成することが大切です。

習熟度別指導のポイント

ポイント1

○　児童生徒の実態に応じて指導内容を重点化しましょう。

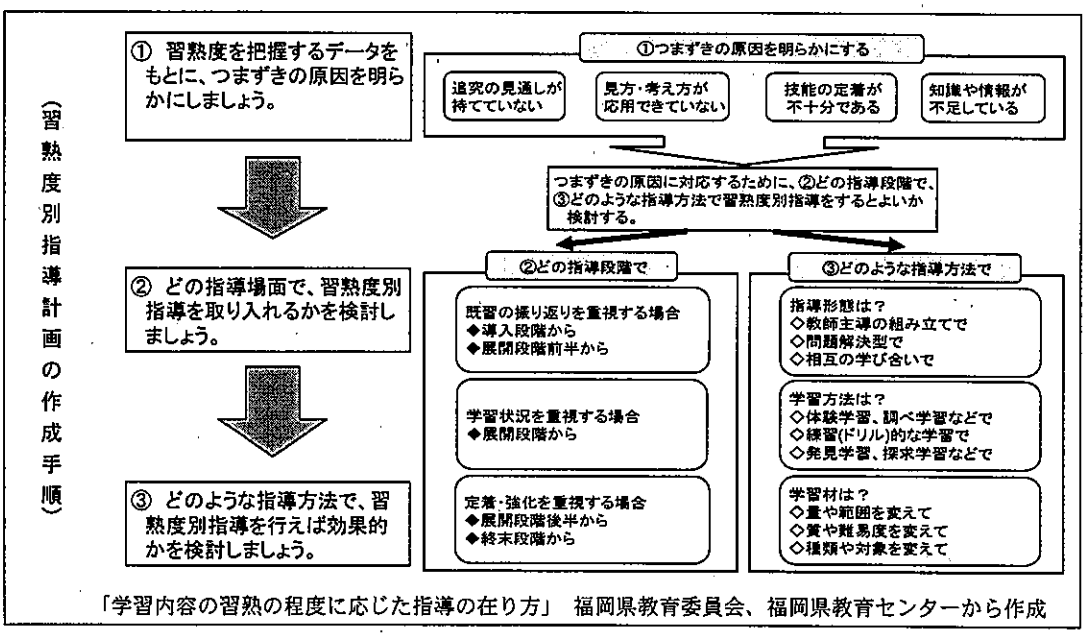
・　各種学力調査、学期末や年度末に行う総括テスト等の結果をもとに、児童生徒の学習内容の習熟の程度を分析し、各学年において重点的に指導する領域や単元を定めることが大切です。

ポイント2

○　単元のどこで、どのような習熟度別指導を行うかを明確にした指導計画を作成しましょう。

・　習熟度別指導は、単元全体を通して実施するだけではなく、児童生徒の実態や教材の特質等を考慮し、単元のどの指導段階で、また、どのような指導方法で指導にあたることが学習内容の定着に効果的かを検討し、指導計画を作成することが重要です。

重点化する指導内容や位置付ける指導段階・指導方法を明確にし、校内で共通理解を図りましょう。



「学習内容の習熟の程度に応じた指導の在り方」　福岡県教育委員会、福岡県教育センターから作成

算数科における習熟度別指導

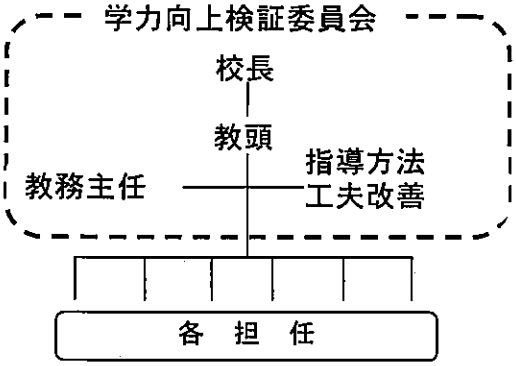
小竹町教育委員会（小竹北小学校）

■　取組のねらい

少人数による習熟度別指導を中心に分割授業やTTでの授業を行い、個の課題に応じた授業形態を工夫することで学力向上を目指す。

■　取組の組織

学力向上検証委員会を定期的に開催し、学力アップの進捗状況を検証し、方策を練る。



教務主任	学力向上検証委員会の開催のための連絡・調整を行い、取組の進捗状況を把握する。 ○　取組の方策や研修の全体計画の立案 ○　研修の日程調整や内容の吟味 ○　講師との打合せ
指導方法工夫改善	学力向上に係るプランの立案と推進、改善を図るための実務リーダーを務める。 ○　学力検査結果の分析 ○　生活・学習チェックカードを使ったアンケートの提案や実施 ○　各学年の学期毎の評価テスト作成・実施と分析 ○　学力向上に係る課題を基にした研修会の企画・運営

■　取組の年間計画

内　　容	実施時期
①「学力アップ推進計画」の作成	４月
②非常勤講師の活用による分割授業・ＴＴ授業	４月～１月
③スキルタイムの計画・実施 ④町作成問題集「学力アップ・ステップ・ジャンプ」の取組	４月～３月 ４月～３月
⑤学期末業者テストの実施・分析 ⑥ＮＲＴ／ＣＲＴの実施・解答コピーの採点・結果分析	７月・１２月・３月 ４月・１月
⑦学力アップ研修 （習熟度別学習の効果的な在り方についての研修等　６回）	５月・６月・７月・１０月・１２月・１月・３月
⑧福岡県教材集の活用 ⑨福岡県診断テスト・学力アップタイム	７月・９月・１０月・１１月・１２月・１月 ９月・１１月・１月
⑩学習規律の児童の自己評価と教師による評価実施	４月～３月（毎月１回）
⑪「家庭学習のすすめ」「自主学習の手引き」の配付 ⑫家庭学習・生活実態調査の実施（学期に１回、強化週間の設定） ⑬家庭学習・生活実態調査の結果を「家庭学習通信」で家庭へ配付	４月 ５月・１０月・１月 ７月・１１月・２月

■　取組の工夫点

1　学力テスト等の結果を踏まえた定着状況カルテと重点単元の設定

2　学年の実態による習熟度別分割方法の工夫

3　学習内容定着と説明力向上のための学習過程（５分間の復習・説明する場の設定）の実施

■　取組の実際

1　学力テスト等の結果を踏まえた定着状況カルテと重点単元の設定

○年児童名（出席番号）		1	2	3	4	5	6	7	誤答率
知識・理解	単元		×						７％
技能						×	×		１３％
考え方			×		×				１０％

資料１　自校で作成した評価テストの結果から作成した定着状況カルテ　※誤答率を記入

学期末に、指導方法工夫改善担当が作成した評価テスト（学習した全ての単元について領域ごとの問題を網羅したもの）を各学年で実施した。その結果から誤答率を示した定着状況カルテ（資料１）を学年ごとに作成し、それを基に重点単元を設定した。

2　学年の課題に応じた習熟度別分割方法の工夫

学習指導にあたっては、個人カルテを作成し、学年の課題に応じた習熟度別指導（資料２）を構想した。そして、分割の観点（資料３）を基に分割方法等を検討した。（資料４）

４年生	５年生
重点単元で習熟度別指導 「じっくりグループ」６人 「どんどんグループ」８人 児童の習熟の実態を単元の内容をもとに４つの方法で構成。担任と児童が話合い、自己選択。	全単元で習熟度別指導 「じっくりグループ」１０人（講師） 「どんどんグループ」１７人（担任） 担任と指導方法担当は固定。 習熟度・学習のペース等をもとに構成。担任と児童が話合い、自己選択。

分割の観点
A　プレテストの結果を基に分割
B　単元に順序性があるものは、既習事項の定着状況を基に分割
C　類似性、系統性のあるものは既習単元の定着状況を基に分割
D　特に思考力が求められる単元は、これまでの学習状況を総合的に判断して分割

資料３　分割の観点

3　学習内容定着を図るための学習過程（５分間の復習・説明する場の設定）の実施

５分間の復習及び説明する場においては、習熟度別に分けたどのグループにも設定するが、その内容についてはグループの子どもたちに応じた内容を工夫する。（例「５分間の復習」…じっくりグループでは個別指導の充実、どんどんグループでは多くの問題に取り組ませる等）

	重点単元	分割方法
1	式と計算	D
2	小数×小数	A・C
3	小数÷小数	A・C
4	計算のじゅんじょ	D
5	読みとる算数（２）	A・B
6	整数	D
7	割合	D

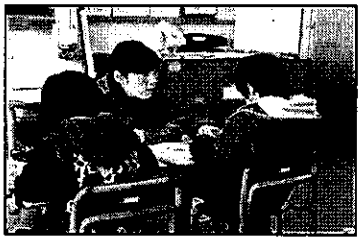
資料４　重点単元ごとの分割一覧

単元名「式と計算」習熟度別分割授業

A：どんどんグループ７名（担任）

めあて　個数の求め方の式を、図と式を関係づけて説明しよう。

①　既習内容について５分間の復習をする。（資料５）
②　モデル文を参考に図を使い説明を考える。
③　グループで式と図を結び付けて話し合う。
④　全体で三通りの考えを交流する。
⑤　適用題２を解いて交流する。



資料５　５分間の復習

B：じっくりグループ６名（指導方法担当）

めあて　個数の求め方の式を図と結び付けて説明を考えよう。

①　既習内容について５分間の復習をする。
②　ペアで式と図のカードの説明を考える。
③　ペアで考えた一つの式の説明を発表する。（資料６）
④　他のカードの式の説明について考える。
⑤　全体で交流する。

資料６　説明の場の設定

■　成果と課題

○担任と指導方法担当が課題を共有し、実態に即した授業づくりを行うことができた。
○観点別三段階評価では、じっくりグループの児童６人のうち２人が、「考え方」観点でＣからＡへ、「技能」でＢからＡへ上がった。
●より効果的な習熟度別グループ編成のあり方の検証。
●算数科以外の教科（国語科等）における習熟度別指導の実施。

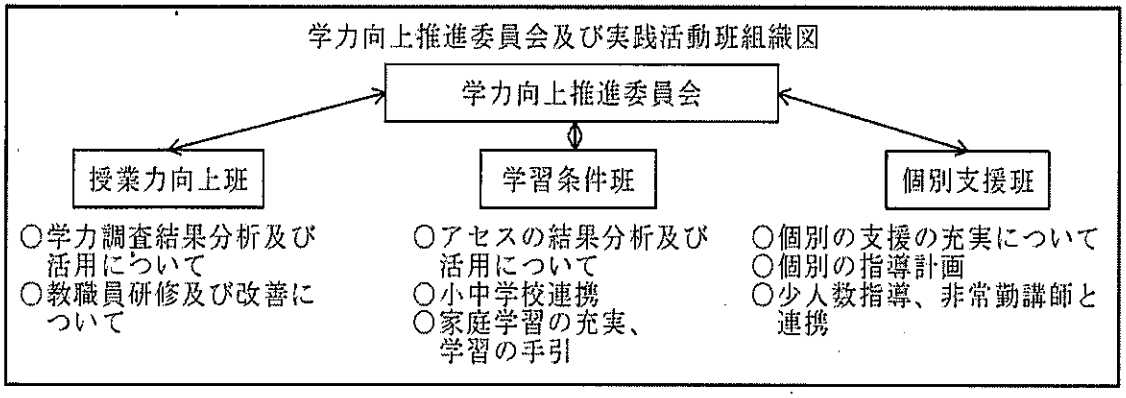
数学科における習熟度別指導

鞍手町教育委員会（鞍手南中学校）

■ 取組のねらい

習熟度別少人数授業を実施することを通して生徒の基礎・基本の徹底を図り、学力向上を図る。

■ 取組の組織について



■ 取組の工夫点

1　各単元の基礎的基本的な内容を重点的に学習

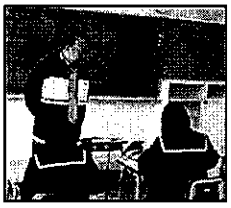
2　板書計画の充実

3　言語活動の充実

4　家庭学習の推進

■ 取組の実際

数学科では、１年生の各単元の始めに、T. Tでの指導を行いながら生徒の理解度などを診断し、後半は、個に応じたきめ細かな習熟度別の少人数授業で指導した。また、２、３年生は、１年生の際の実態をもとにして、各単元ともに習熟度別の少人数授業を実施し、授業を行っている。

	基礎的な内容を重視したグループ	応用的な内容を重視したグループ
基礎・基本の徹底	①　きめ細かな指導を行い、基礎・基本の徹底を図る。 ②　ドリル学習のくり返しを行う。	
	前学年のドリル等も活用しながら、単元の学習に必要な計算技能の確認を行う。 教科書の問題を簡単な数に置き換えるとどうなるかアドバイスを行う。  計算技能の確認	前時までに学習した同じ単元の計算問題を最初の５分間に集中して復習する時間を設定する。 答え合わせ後の練習問題は個人でファイリングさせておき、いつでも振り返ることができるようにする。

<table>
<tr><td rowspan="2">板書の工夫</td><td colspan="2">① 生徒にとって分かりやすい授業の流れや組み立てにするために、事前の計画・準備を充実する。
② 思考の流れをキーワードで黒板に明示して、今、どんな課題の、どんなステップを考えているのか、一目で分かるようにする。</td></tr>
<tr><td>必要となる既習の公式・きまり等を掲示し、生徒が課題に取り組む際のヒントとなるようにする。</td><td>本時のねらいに応じた３つのスタイル（比較・検討型、対比・対立型、分類・関連付け型）を使い分け、本時の内容がまとまるように工夫する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">言語活動の充実</td><td colspan="2">① 数学的な表現を用いて、根拠を明確にして説明できるようにする。
② 自分の言葉で、他者に分かりやすく説明できるようにする。
③ 言葉や数，式，図，表，グラフを適切に使って考える。
④ 思考の過程や判断の根拠などを数学的に表現する力を身につける。</td></tr>
<tr><td>思考のステップごとに順を追って考えを関係づけたり吟味したりする。</td><td>本時のねらいに応じた３つのスタイル（比較・検討型、対比・対立型、分類・関連付け型）を明らかにし、考えを吟味させる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">家庭学習の工夫</td><td colspan="2">① 効果的な家庭学習の提示・家庭学習の大切さの啓発
② 自主学習ノートの活用・「Step by Step」（北九州教育事務所作成資料）の活用</td></tr>
<tr><td>その日に学習した計算問題を家庭学習の課題として出題し、翌日、点検及び指導を確実に行う。</td><td>応用的な内容に取り組ませる。</td></tr>
</table>

■ 取組の成果と課題

学力調査結果の変容　※県と本校の平均得点率の比較（昨年度と本年度）

全国　数学Ａ	３．４ポイント上昇
全国　数学Ｂ	３．３ポイント上昇
県学力分析テスト　数学	１年２ポイント上昇　２年１ポイント上昇　３年２ポイント下降

成果

○ 学力調査の分析を行い、個に応じた指導を充実することで各種学力調査の結果が上表のように変容した。（特に数学Ａ問題では「基礎コース」の生徒の得点率の伸びが大きかった。）

○ 診断的評価を行うことで、低学力層の生徒のつまずきが確認でき、それを指導に生かすことにより、学習に対する興味・関心を高めることができた。

課題

● 定期的に学力向上推進委員会等の会議を開催しているが、教科の指導方法について全職員の共通理解を図りながら、より効果的な指導を行うまでには至っていない。教科担任を中心にして、どの単元でどのような協力体制のもと学習指導を行っていくか、より綿密な計画が必要である。

基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導

■　本県における基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導の状況

本県では多くの小・中学校が基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るためのドリル学習等の繰り返し指導を行っています。例えば、始業前の朝の活動の時間や放課後等を活用し、基礎的な計算力や漢字を読んだり書いたりする力を高める指導等を行っています。しかし、小学校の約１割、中学校の約３割の学校においては、児童生徒の実態に応じ、重点的に指導する内容を定めないままに、繰り返し指導を行っている状況が見られます。児童生徒の基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し学習を効果的に行うには、実態分析に基づき指導内容を重点化することが重要です。

平成25年度小・中学校におけるドリル学習等繰り返し指導の状況

項　　目	小学校	中学校
重点的に指導する内容を定めて繰り返し指導を行っている	88.2%	67.9%
重点的に指導する内容を定めてはいないが繰り返し指導を行っている	11.4%	27.8%
繰り返し指導を行っていない	0.4%	4.3%

（H25年度学力向上推進に関する調査）

■　繰り返し指導の実施にあたって

基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るために繰り返し指導を充実させるには、校内の学力向上推進委員会等を中心に、児童生徒の学力実態に基づく指導計画を作成し、全教職員共通理解のもとで組織的に取り組むことが重要です。

繰り返し指導のポイント

ポイント1

○　指導する内容を重点化した計画を立てましょう。

・　各種学力調査、学期末や年度末に行う総括テスト、単元の評価テスト等の結果をもとに、児童生徒の学習内容の習熟の程度を分析し、各学年において重点的に指導する領域や内容を定め、組織的に指導にあたることが大切です。

ポイント2

○　児童生徒一人一人に基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることができるよう指導方法を工夫しましょう。

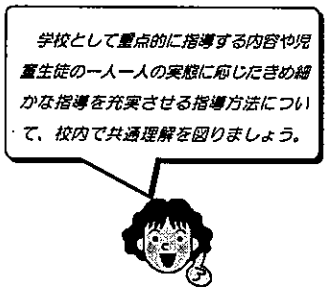
・　児童生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を充実させるために、一斉指導に加え、個別指導やグループ別指導等の指導方法を工夫することが大切です。特に、グループ別指導については、習熟の程度に応じて学習集団を編成し指導にあたることが学力向上には効果的です。

【繰り返し指導実施までの流れ】

1　児童生徒の学力実態を把握するための評価テスト問題の内容を検討し、評価テストを実施する。
2　結果分析によって、基礎的・基本的な知識・技能の定着状況を把握する。
3　指導する内容の重点を定め、指導方法や指導体制を改善し、年間指導計画を作成する。
　＜指導方法＞
　・習熟度別指導、個別指導、グループ別指導等
　＜指導体制＞
　・ティーム・ティーチング、外部人材の活用等
4　校内研修等で全教職員の共通理解を図り、繰り返し指導等を実施する。

【学力向上推進組織の役割】

◇　評価テストの結果分析
◇　繰り返し指導の指導計画の改善
◇　繰り返し指導実施状況の把握、支援



※　基礎基本を含む活用力を育成する教材集（福岡県教育委員会）には、習得した知識・技能の確実な定着を図るための教材を掲載しておりますので活用してください。

基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るドリル学習等の指導（小学校）

須恵町教育委員会（須恵第二小学校）

■　取組のねらい

○　学力向上プロジェクトとして、６つの部会を設定し、総合的に学力向上に向け取り組む指導体制を整備し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。

○　学力向上プロジェクト各部会の目的（児童に身に付けさせたい力）を具体的なものに設定し、各部会が目的的に取り組めるように配慮し、取組内容を明らかにする。

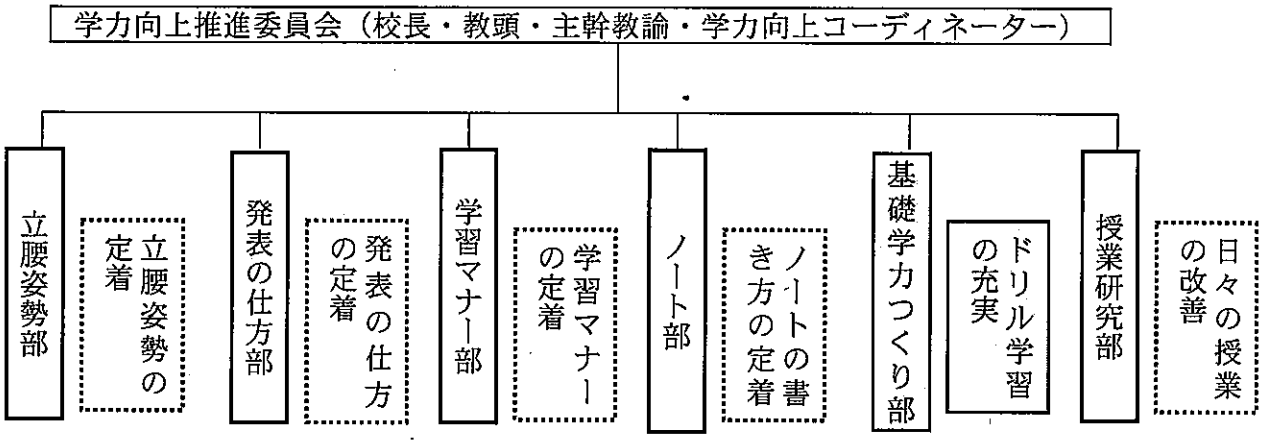
○　学力プロジェクト会議を２ヶ月に１度開催し、達成状況の把握とそれを受けたその後の取組について具体化する。

○　取組内容を共通理解し、徹底できるように生活目標との関連を図り、同学年研修や生徒指導委員会での交流テーマとして取り入れる。

○　ＳＰチャレンジや授業参観等、保護者が来校する際に学校の重点的取組として学力向上プロジェクトで取り組んでいる内容について周知させ、啓発を図る。

■　取組の組織

学力プロジェクトの設置



■　取組の年間計画

基礎学力つくり部（ドリル学習の充実）の年間計画

月	4　5　6　7　8　9　10　11　12　1　2　3
学びタイム	―――→　―――→　―――→
のびっ子タイム（全　２０回）	●●　●●　●●　●●●　●●　●●●　●●●　●●●
ＳＰチャレンジ（全　６回）	●　●　●　●　●　●
検証時期	◎県診断テスト　◎県診断テスト　◎県診断テスト　◎標準学力テスト

ドリル学習と関連したプロジェクト部会の取組

立腰姿勢部	ＣＤを活用した立腰姿勢タイムの実施（学びタイム・朝の会等で実施）
学習マナー部	ふで箱・鉛筆・定規・分度器・色鉛筆等の準備、用意の仕方、置き方の指導
発表の仕方部	学年段階を踏まえた発表の仕方の提示と定着を図る指導
ノート部	学年にそったノートの書き方の提示と指導を生かしたノートコーナーの設置
授業研究部	活用する力を高めるための算数科学習指導を中心とした研究の実施

■　取組の工夫点

1　日々の「学びタイム」（５校時開始前の１０分間）において、ドリル学習を積み重ねることで基礎的・基本的な知識・技能の定着を図った。
2　年間２０回（水曜日７校時）の「のびっ子タイム」（放課後補充学習）を５・６年生の希望者に実施し、児童の課題に応じた学習を行うことで、より確かな基礎的・基本的な知識・技能の定着を図った。
3　年間７回のＳＰチャレンジ＜スペシャルチャレンジ＞（保護者によるプリント学習）を実施することで、保護者の学習についての理解を深めるとともにより確かな基礎的・基本的な知識・技能の定着につなげた。

■　取組の実際

1　学びタイムの取組

毎日の第５校時開始前１０分間を学びタイムとして位置づけ、ドリル学習を積み上げている。月曜日から、金曜日までに行う内容について「基礎学力つくり部」が提案し、全校で共通理解して基礎基本の学力の向上に取り組んでいる。各学級で工夫し、学習内容にそって、フラッシュカードや１００珠そろばん、学習プリント等を活用しながら取り組んでいる。**（資料１）**

資料1　毎日10分間の学びタイム

2　のびっ子タイム（放課後補充学習）

水曜日の第７校時に５・６年生の希望者に年間２０時間の「のびっ子タイム」（補充学習）を実施している。習熟度別の算数科学習プリントを用意し、児童一人一人が自分の進度にあったプリントを選択し、学習を進めた。教職員については、２グループに分け、ローテーションで児童を支援するようにした。**（資料２）**

資料2　補充学習での支援

3　ＳＰ（スペシャル）チャレンジ（保護者によるドリル学習）

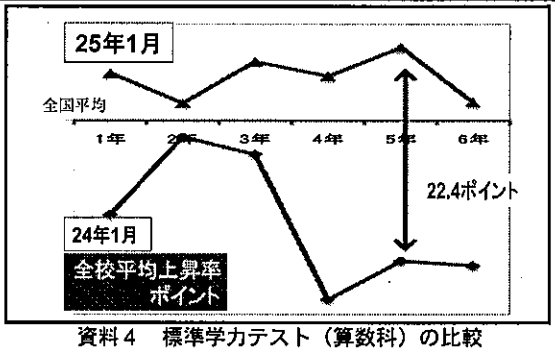
１回（４５分間）を年間６回の予定でＳＰチャレンジを実施している。内容は、基礎基本の学力に関する学習プリントに取り組み、保護者と連携し答え合わせ及び児童への支援を行っている。工夫点として、毎回最初に学級担任から、計算の仕方等についての考え方を児童・保護者について説明することで、児童だけではなく保護者の児童への支援に生かしてもらうようにした。**（資料３）**

資料3　SPﾁｬﾚﾝｼﾞでの保護者による支援

■　取組の成果と課題

【成果】

○　右図は、算数科の標準学力テストの結果である。全校の平均上昇率は１２ポイントであり、どの学年についても１年間で得点が伸びていることがわかる。特に５年生は、２２.４ポイントと大幅に上昇していることが分かる。**（資料４）**



資料４　標準学力テスト（算数科）の比較

○　学力向上プロジェクトの各部会が相互に機能し、基礎学力つくり部の取組を協働的に実施したことで、教職員の学力向上への意識が高まった。
○　児童、教職員ともに学力の高まりについての効力感を味わうことにつながった。

【課題】

●　今後、基礎基本の学力を高めるためには、家庭学習の充実をさらに図ることが大切であり、児童・保護者への具体的な支援を究明し、実施する必要がある。
●　算数科に関する基礎基本の学力は、高まってきているので、今後は、国語科及びその他の教科に取組を広げていく必要がある。

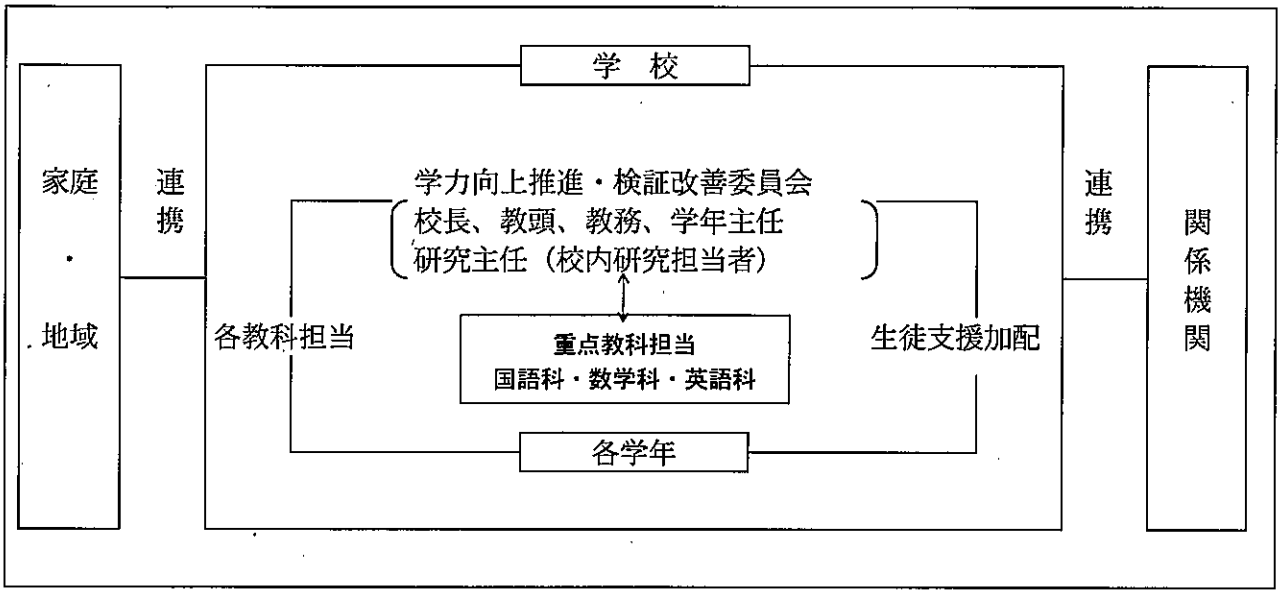
基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るドリル学習等の指導

築上町教育委員会（築城中学校）

■ 取組のねらい

教科の特性に基づいたドリル学習と補充学習でのドリル学習をとおして、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。

■ 取組の組織



■ 取組の年間計画

月	内　容	月	内　容
4	学力向上プランの提案・審議・確認 ドリル学習の計画・実施 実態把握(前年度の全国・県学力実態調査) 全国学力学習状況調査、CRT の実施	9	校内授業研修の実施（講師招聘）
		10	県学力実態調査検証システムの活用
		11	校内授業研修の実施（講師招聘）
6	県学力学習状況調査の実施 CRT 結果の分析	12	２学期の評価・検証
7	１学期の評価・検証、学力強化講座の実施 ドリル学習の見直し	2	校務分掌会議（年間総括及び次年度の計画策定） ドリル学習のまとめ
8	校内授業研修の実施（講師招聘）	3	次年度への取組

■ 取組の工夫点

1　教科の特性に基づいたドリル学習の工夫

(1) 国語科：授業→宿題→小テスト→評価テスト等のくり返し指導
(2) 数学科：前時の復習を１単位時間の最初に設定
(3) 英語科：単語、基本文の反復練習

2　補充学習でのドリル学習の位置付け

(1) 習熟度別指導でのコース選択の工夫
(2) 昼休みや放課後の補充学習における雰囲気作り

■　取組の実際

1　教科の特性に基づいたドリル学習の工夫

(1) 国語科：宿題→小テスト→単元テストのくり返し指導

①　漢字・語句・語彙の確実な定着を図るために、授業→宿題→小テスト→評価テストのサイクルで指導を行った。

②　基礎基本を含む活用力を育成する教材集の小問について、授業→小テスト→授業のサイクルで指導を行った。授業では、考えや表現内容を交流する場を作り、班の形態（生活班と異なる学習班を編制）や評価の方法を工夫した。このことで、思考力・判断力・表現力の向上が図られた。

(2) 数学科：前時の復習を１単位時間の最初に設定

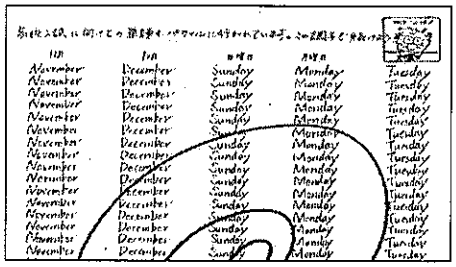
①　１単位時間の導入でねらいとの関連を押さえ、前時の復習をドリル学習で行った。

②　０時間目の１０分間（第１・２学年は前半朝読書）を利用して問題を解かせ、採点を行い目標に達していない生徒については昼休みや放課後を利用して補充学習を行った。

(3) 英語科：単語、基本文の反復練習

①　単語練習ノート（マラソンノート）に毎日家庭で単語を１ページ書かせた（**資料１**）。週１回テストを行い、合格点に満たない生徒は再テストを行い基礎基本の徹底を図った。また、授業中にプレテストを行い、目標達成に向けての強化も図った。

②　日本語と異なる語順に着目させるため語順に注意して英作練習ができるような学習プリントを準備し、繰り返し学習させた。



資料１　単語練習ノート（マラソンノート）

③　英語を使う力を育てるために、コミュニケーション活動を１単位時間に設定し、その際使用する基本文を反復練習させた。

2　補充学習でのドリル学習の位置付け

(1) 習熟度別指導でのコース選択の工夫

３年生対象の夏季休業中、５日間［２０時間］の強化講座においてドリル学習を位置付けた。コースは基礎クラス、標準クラス、応用クラスとした。生徒の学力を基準にするとともに、生徒の要望も加味したことによって、スムーズにコース分けを進めることができた。コースを３つに分けることにより、少人数で生徒のニーズにあった課題を与え、学習を進めることができた（**資料２**）。積極的に発言する場面も多く見られ、多数の生徒が意欲的に授業に参加することができた。また普段ではできない発展的な課題を出すことができ、生徒の応用力の向上にも繋がった。

資料２　少人数のクラスで指導をしている様子

(2) 昼休みや放課後の補充学習における雰囲気作り

毎日の朝学習（モジュール、０校時［２０分間］）を設定し、まとめテスト、再テスト・補充学習を行った。（第１・２学年は時期を設定。第３学年については通年。）

また、放課後等に学力補充の時間を設け、指導をした。生徒との普段からのコミュニケーションを密に取り、生徒がいつでも学習したいという雰囲気作りを大切にした。生徒一人一人の学習レベルにあった学習プリントを準備し、生徒の学力向上に努めた。

■　取組の成果と課題

【成果】

○　教科の特性に基づいたドリル学習を工夫したことによって、基礎基本の確実な定着を図ることができた。国語ＡＢ、数学ＡＢ全てにおいて、標準化得点が向上している。（昨年度比２ポイント）

○　習熟度別少人数クラスを設定することによって、個に応じた学習に取り組ませることができた。各自の学力にあった授業であり、生徒が意欲的に学習することにもつながった。

【課題】

●　教科の特質に基づいた効果的なドリルの内容を吟味すること

●　１単位時間のどこでどのように交流させるか交流の在り方を工夫すること

習得した知識・技能を活用する力を育てる学習指導

■　本県における児童生徒の活用に関する学力の状況

本県においては、平成２５年度の全国学力・学習状況調査の結果から、小・中学校ともに、主として知識・理解に関するＡ問題に比べ、主として活用に関するＢ問題の平均正答率が低い状況にあります。このことについては、平成１９年度に本調査が始まって以来改善されない状況にあります。

各教科区分の平均正答率(福岡県)

	国語Ａ	国語Ｂ	算数・数学Ａ	算数・数学Ｂ
小学校	63.2%	49.1%	77.2%	58.7%
中学校	75.4%	66.5%	62.0%	39.8%

(H25全国学力・学習状況調査)

小・中学校学習指導要領解説総則編「第１章　総説」では、「確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。」と示しています。

そこで、今後各学校においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習指導及び児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する学習指導を充実させることが重要です。

■　習得した知識・技能を活用する学習活動の実施にあたって

習得した知識・技能を活用する学習を充実させ、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成するには、単元に「活用」する場面を位置付けるとともに、児童生徒が課題解決に向け、習得した知識や技能を駆使するよう、要約、説明、論述等の言語活動を取り入れた指導を充実させることが重要です。

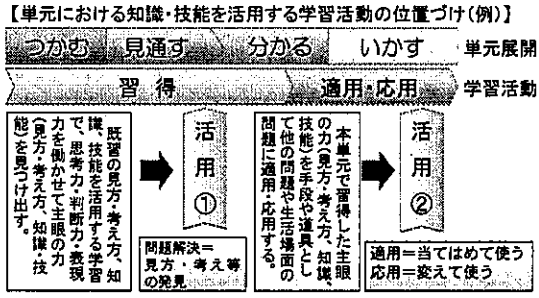
習得した知識・技能を活用する学習指導のポイント

ポイント1

○ 単元に知識・技能を「活用」する場面を位置付けましょう。

・ 既習の知識・技能を活用する場面は、単元後半に習った知識・技能を別の問題に当てはめて解いたり、学んだ結果をまとめて発表したりする学習場面だけではなく、単元前半において、前単元までの既習事項を使って本単元の課題を解決する学習場面も考えられます。

【単元における知識・技能を活用する学習活動の位置づけ(例)】



(「小・中・高等学校における『思考力・判断力・表現力』の評価と授業づくり」福岡県教育センター)

・ 単元前半での「活用①」で活用させるべき基礎的・基本的な知識・技能とは、主に前単元や前学年で身に付けている「見方・考え方」「知識・技能」であり、既習事項を使って、本単元の新しい内容を主体的に発見させるという「活用」の場面です。

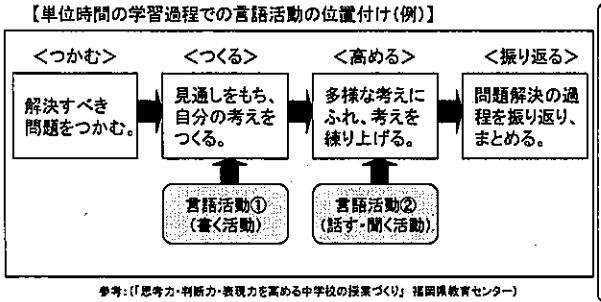
・ 単元後半での「活用②」は、本単元で身に付けた「見方・考え方」「知識・技能」を「当てはめて使う」「形を変えて使う」という適用的・応用的な「活用」の場面です。

ポイント2

○ 各教科等の指導のねらいに応じた言語活動を充実させましょう。

・ 言語活動は、児童生徒が思考したり判断したりした過程や結果を可視化するとともに、言語として表現することで、明確な考えとして自覚することができます。言語活動の実施にあたっては、目的、内容、方法を明確にし、各教科等の特質に応じた活動を行うことが重要です。

【単位時間の学習過程での言語活動の位置付け(例)】



参考:(「思考力・判断力・表現力を高める中学校の授業づくり」福岡県教育センター)

・ 前半の「言語活動①」では、解決すべき問題に対する自分の考えをつくるための「書く活動」、後半の「言語活動②」では、考えを練り上げるための「話す・聞く」活動を位置付けます。

※ 言語活動を位置付ける際、各教科等における言語活動の目的を明確にすることが大切です。
　例えば、算数科においては、「数学的な思考力・表現力を育成する」ために、具体物を用いたり、言葉や数、式、図を用いたりして考え、説明するといった言語活動を位置付けます。

※　基礎基本を含む活用力を育成する教材集（福岡県教育委員会）には、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力を育成する教材を掲載しておりますので活用してください。

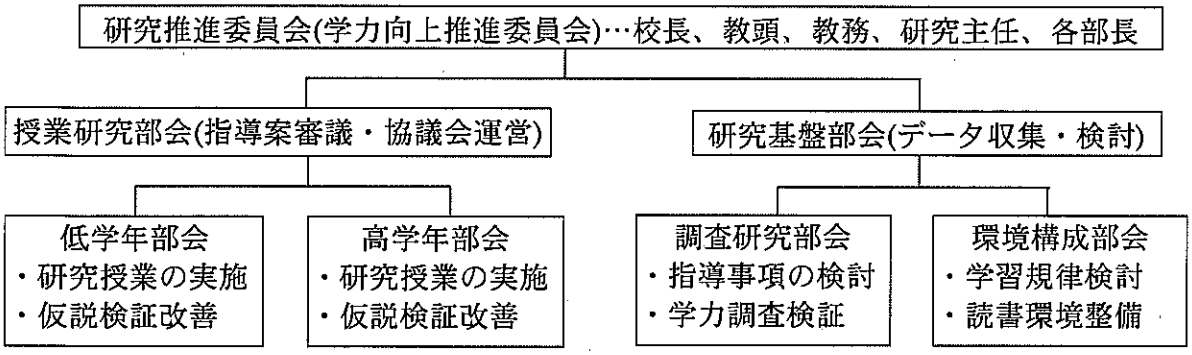
国語科における習得した知識･技能を活用する力を育てる学習指導

上毛町教育委員会（西吉富小学校）

■　取組のねらい

国語科の「読むこと(説明的文章)」における各学年の指導事項を明確にして、単元に知識・技能を活用する場面を位置づけ、知識・技能の確実な定着とそれを活用する力の育成を図る。

■　取組の組織



■　取組の年間計画

	1学期	2学期	3学期
授業研究	・いきものクイズ『くちばし』 ・やさいブック『たんぽぽのちえ』 ・リーフレットをつくろう 『動いて、考えて、また動く』	・まとまりを考えて読む『すがたをかえる大豆』 ・筆者のしかけを読む『天気を予想する』 ・見方を広げて読む『鳥獣戯画を読む』 ≪各学年、2単元を実践≫	・実践記録の作成 ・研究のまとめの作成 ※言語活動の見直し
研究基盤	・指導事項の系統表の作成 →	・全国学力･学習状況調査結果の検証 ・読書環境の整備 →	・CRT学力検査
	・学習規律の確認	・学習規律の定着化 →	

■　取組の工夫点

1　単元において習得させる知識・技能を明確にする。（ねらいの焦点化）

2　習得した知識・技能を活用する場面（単元を貫く言語活動「リーフレットづくり」）を設定する。

(1)　第1教材『見立てる』で、要旨のまとめ方を習得させる。

(2)　第2教材『生き物は円柱形』で、第1教材での知識・技能を活用して要旨をまとめさせる。

(3)　リーフレットづくりをとおして、思考力・判断力・表現力を育成する。

■　取組の実際（第5学年「要旨をとらえて、リーフレットにまとめよう」『生き物は円柱形』）

1　本単元において習得させる知識・技能を明確にする。（ねらいの焦点化）

本単元でめざす子どもの姿を､「文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえることができるようにする。」とした。

本単元を構成している2つの教材（第1教材『見立てる』､第2教材『生き物は円柱形』）に共通していることは、①最初と最後の段落が対応していること、②キーワードをつかみやすいことである。そこでここでの要旨をとらえることは、「①筆者の考えを明確にする（最後の段落）そのために、②どんな問いを投げかけ（最初の段落）、③どのような事例を挙げているか（他の段落）キーワードを落とさずに決められた字数でまとめる」ことであると考えた。

2　習得した知識・技能を活用する場面（単元を貫く言語活動「リーフレットづくり」）を設定する。

本単元のねらいを達成するために、「自分なりに読み取った文章の内容を再構成してまとめ直し、自分の考えを入れて４年生に伝えるリーフレットをつくる活動」を設定した。

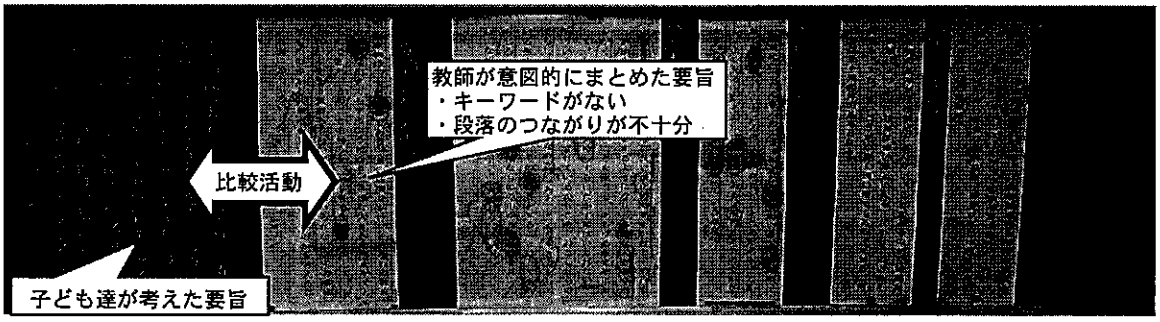
この活動は、４年生に伝えるという相手意識、目的意識が明確である。また、リーフレットの要素として要点、要旨、筆者の表現･構成の工夫、自分の意見･感想等があり、本単元のねらいである「要旨をとらえること」を習得、活用させるために適していると考えた。

(1) 第１教材『見立てる』で、要旨のまとめ方を習得させる。

第１教材『見立てる』では、要旨のまとめ方を習得させた。まず、単元を貫く言語活動である「リーフレット」のモデル提示を行った。そして、第１教材『見立てる』で、要旨のまとめ方に絞って学習を展開した。筆者の考えが書かれている第１段落と第６段落を取り上げ、「想像力」というキーワードを手がかりに要旨をまとめさせた。このとき、100 字以内という制限を課すことで、考えの中心を意識化させることができた。

(2) 第２教材『生き物は円柱形』で、第１教材での知識・技能を活用して要旨をまとめさせる。

第２教材では、第１教材で習得した要旨のまとめ方を活用し、150 字以内でまとめさせた。その後、教師が意図的にまとめた要旨(キーワードが入っておらず、また、段落のつながりが不十分であるもの)と子ども達がまとめた要旨を比較する活動を取り入れた（**資料１**）。このことで、子ども達の思考が揺さぶられ、言語活動の活性化を図ることができた。キーワードに気をつけながら筆者の考えをまとめ、要旨を的確に捉えていった。

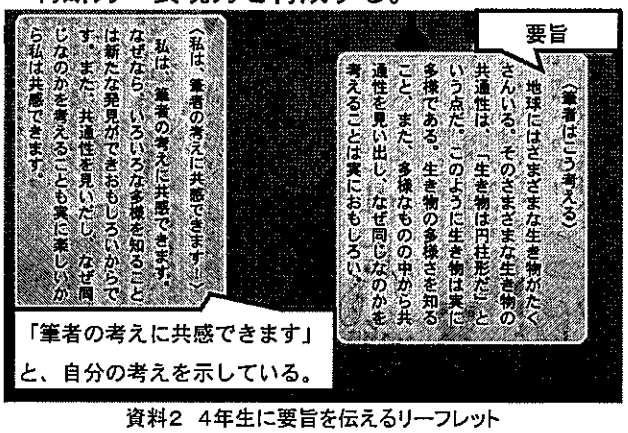


資料1　教師がまとめた不十分な要旨と、自分や友達がまとめた要旨とを比べながら話し合いができるようにした板書

(3) リーフレットづくりをとおして、思考力・判断力・表現力を育成する。

リーフレットの構成については、リーフレットに必要なものの中から、自分がまとめたい内容を選ばせた。ただし、要旨は必ず入れることを条件とした。子ども達は、４年生に伝えたい内容をそれぞれ選んでリーフレットを構成した。

リーフレットには、**資料２**に示したように、要旨と筆者の考えに対する自分の考えを書くことができた。これは、子ども達が、十分思考判断し、そして表現したことの結果であると考える。



資料2　4年生に要旨を伝えるリーフレット

■　取組の成果と課題

【成果】

○　習得させる知識・技能を明確にし、習得した知識・技能を活用する活動を位置付けたことによって、要旨のまとめ方を確実に捉え、それを活用して筆者が伝えたいことを要旨としてまとめることができた。

○　比較活動を位置付けたことにより、子ども達の思考が活性化し、言語活動の充実を図ることができた。

【課題】

●　習得、活用を位置づけた単元指導計画のさらなる工夫。

●　課題意識を継続させることが困難な児童への指導方法の工夫。

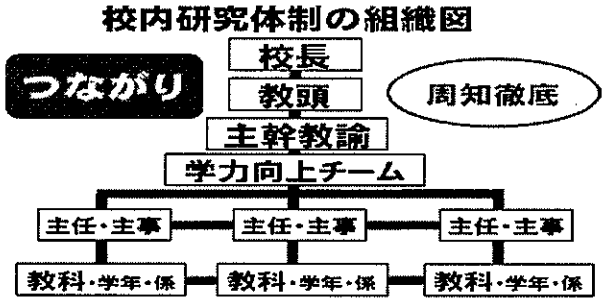
数学科における習得した知識・技能を活用する力を育てる学習指導

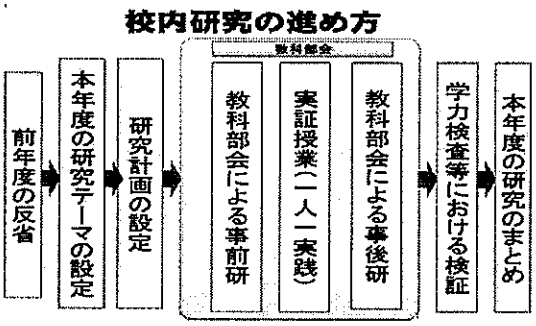
飯塚市教育委員会（二瀬中学校）

■　取組のねらい

習得した知識・技能を活用する単元構成の工夫を行い、知識・技能を活用するための支援や言語活動を位置付けた指導を重視することで、生徒一人一人の思考力・判断力・表現力を育成できるようにする。

■　取組の組織





■　取組の年間計画

学期	１学期	２学期	３学期
計画	５月：H24 年度の標準学力テストの分析をもとに課題の共有化 ５月：主題研究の進め方についての研修会（講師招聘） ７月：１学期の取組に関する成果と課題の分析と２学期の取組に関する見直し ８月：教科部会による指導案審議	10 月：研究授業 ※同教科の教師と外部からの指導主事等が授業を参観し、その後協議会を実施 10 月：国や県の学力状況調査の分析 11 月：授業研のまとめ（教科部会）	１月：２学期の取組に関する成果と課題の分析と３学期の取組に関する見直し ２月：主題研究のまとめ作成 ３月：次年度の学力向上に向けての計画作成

■　取組の工夫点

手立ての工夫１：単元構成の工夫

・学習過程の「利用する段階」に習得した知識・技能の活用を位置付ける。

手立ての工夫２：知識・技能の活用のサポート

・導入段階において、既習の知識・技能をふり返らせる「サポートシート①」と題意をしっかりとつかませる「サポートシート②」を提示する。

・展開段階において、思考を促すことができるように、表やグラフ、式の関連付けができる「サポートシート③」と思考の支援が必要な生徒のための「サポートシート④」を提示する。

手立ての工夫３：言語活動の位置付け

・自他の考えをグループで交流した後に、全体で交流する活動を位置付ける。

■　取組の実際（第２学年　数学科　「一次関数」）

手立ての工夫　１：単元構成の工夫

学習過程	つかむ段階	調べる段階	利用する段階
学習内容	一次関数とグラフ	一次関数と方程式	身の回りの事象への一次関数の利用
ね ら い	知識・技能の習得		知識・技能の活用

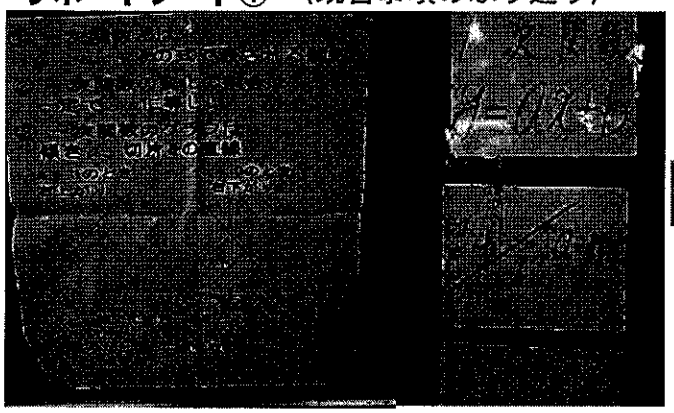
○　生徒が関数を日常の生活と関連付けて考察することができるように、単元の終末の「利用する段階」で、「基礎基本を含む活用力を育成する教材集」の問題を活用課題として設定した。

手立ての工夫 2：知識・技能の活用のサポート

○　単元の「つかむ段階」、「調べる段階」で習得した知識・技能を活用することができるように、本時学習の導入段階、展開段階で生徒の思考を促すサポートシートを準備・提示した。

【導入段階】

サポートシート①　〈既習事項のふり返り〉



サポートシート②
〈購入時の費用、燃費、走行距離、ガソリン代など必要情報の比較提示〉

「ハイブリッド自車とガソリン車Aはどちらがお買い得か」を、関数を使って考え、「ハイブリッド車Bは○年以上乗ればお得である。」ことをあきらかにしよう。

問題

誠さんの家庭では、新車の購入を検討しています。購入の候補になっている車は、ガソリン車Aとハイブリッド車Bです。そこで、どちらの方が費用が安くなるかを調べて、購入する車を決めることになりました。

下の表は、購入のときに必要な費用と、それぞれの車の燃費（自動車などが燃料1Lあたりで走れる距離）を調べた結果です。

	ガソリン車A	ハイブリッド車B
購入時に必要な費用	200万円	280万円
燃　費	15km/L	30km/L
1年間の走行距離	15000km	15000km
1年間のガソリン代		15000÷30=500 160×500=80,000 (8万円)

誠さんのお父さんは、1年間に15000km、ガソリンを1Lあたり160円として計算します。

【展開段階】

サポートシート③
〈表、グラフ、式をかく枠を設けた学習プリントの活用〉

表を使って説明する

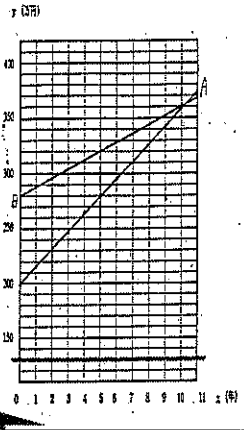
【表】ハイブリッド車B　　xが1増えると yは8増える → y=8x

乗った年数x年	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12・・・
必要な費用y万円	280	288	296	304	312	320	328	336	344	352	360	368	376

式になおせば、計算せずにyを求められる

【表】ガソリン車A　　xが1増えると yは16増える → y=16x

乗った年数x年	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12・・・
必要な費用y万円	200	216	232	248	264	280	296	312	328	344	360	376	392



【式】を使って説明する。

A: $y=16x+200$ …①

B: $y=8x+280$ …②

$16x+200=8x+280$

$16x-8x=280-200$

$8x=80$

$x=10$ を①に当てはめると、

$y=160+200$

$y=360$ となる。xは、乗った年数、yは必要な費用だから、等しくなるということは、10年目にAとB両方が360万円必要となるということ。そして、それぞれに1年間必要な費用を足すと、

サポートシート④
〈思考の支援が必要な生徒へのヒントカードの提示〉

ヒントカード②

ガソリン車の1年間のガソリン代は（　　）万円

必要な総費用（購入時に必要な費用200万円＋毎年のガソリン代）

【表】ガソリン車A

乗った年数x年	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12・・・
必要な費用y万円	200	216											

【表】ハイブリッド車B

乗った年数x年	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12・・・
必要な費用y万円	280	288											

ハイブリッド車の1年間のガソリン代は（　　）万円

必要な総費用（購入時に必要な費用280万円＋毎年のガソリン代）

手立ての工夫 3：言語活動の位置付け

○　考えを付加・修正・強化できるように、グループ→全体の交流活動を位置付けた。

〈グループによる言語活動〉

■　取組の成果と課題

○　単元の終末に教材集の問題を活用課題として設定したことは、習得した関数の知識・技能を利用して身の回りの事象を考察する力を高める上で有効であった。

○　既習事項のふり返りや、思考を促すサポートシートの提示は、表やグラフ、式による表現を関連付けた数学的表現を高め、問題解決する上で有効であった。

○　言語活動の位置付けは、自他の考えを広げたり、深めたりする上で有効であった。

●　表現が不十分な生徒もいたため、習得段階においても数学的表現を重視した指導をする。

放課後の補充学習や土曜日、長期休業中における取組

土曜日、放課後、長期休業中の取組

■　本県における土曜授業等の補充的な学習の学力向上の取組の状況

県内の市町村教育委員会及び小中学校では、授業時数確保と学力向上等のために土曜日等における教育活動の取組が教育課程内で行われています。（表１、表２）

また、文部科学省は、土曜授業を子どもたちに充実した学習機会を提供する方策として捉え、学校教育法施行規則の改正を行いました。これにより、設置者の判断でこれまで以上に土曜授業に取り組みやすくなりました。

以上のような状況を鑑み、福岡県では、平成２６年度から、新たに土曜授業を推進することにしました。その主なねらいは次のとおりです。

表1　土曜授業実施学校数

	平成24年度	平成25年度
小学校	66(13.9%)	273(57.4%)
中学校	43(20.2%)	134(63.5%)

（H25土曜授業等に関する調査）

表2　全校のうち、土曜授業で外部人材を活用した教科授業を実施した学校数

	平成24年度	平成25年度
小学校	11(2.3%)	39(8.2%)
中学校	3(1.4%)	17(8.1%)

（H25土曜授業等に関する調査）

開かれた学校づくりを推進する観点から土曜日に保護者、地域住民等の外部人材を活用した授業等を通して、学ぶ意欲を育み、確かな学力を育成します。

■　土曜授業の実施にあたって

1　土曜授業の内容

平成24年3月22日付「小・中学校における土曜日の授業の実施に係る留意点について」では、土曜授業の内容を以下のようにまとめています。

(1) 家庭・地域との連携による行事や授業
- 保護者、地域住民等の外部人材の協力を得て実施する授業
- 総合的な学習の時間等における校外学習や体験活動　等

(2) 保護者、地域住民等への公開授業
- 公開を前提とした確かな学力・体力等の定着を図る授業や学習発表会　等

具体的な活動内容には、以下のようなものが考えられます。

活動種別	活動内容(例)	主な実施方法	具体的な取組内容(例)	保護者、地域住民等による支援例
(1)	自分のペースに合わせた国語科学習	個別指導	保護者、地域住民等の協力により基礎学力向上のため国語の補充的な学習を実施	個の課題に対応、○付け支援
(1)	数学の応用問題に強くなろう	TT授業形式	地域の教員OBや大学生の支援により、活用する力の育成に向けた数学の発展的な学習を実施	一斉授業、個の課題に対応(GT)
(1)	地域の伝統工芸を守る総合的な学習の時間	課題別	伝統工芸の保存会の歴史について話を聞いたり、工芸の制作を体験したりする学習を実施	フィールドワークのガイド
(2)	学習発表会	一斉	日頃の学習の成果を保護者、地域住民等の前で発表し、学ぶ意欲や表現力を高める活動を実施	感想、コメント
(2)	○○小スポコン大会	一斉	保護者や地域住民の応援の中、長縄跳びや馬跳びなどの時間や回数を競い、体力向上をめざす活動を実施	審判補助、応援
(2)	将来の自分を見つめるキャリア教育	課題別、一斉	地域住民の様々な職業の話や体験を通して、自分の将来について考え、発表する活動を実施	講話、ものづくりの指導、感想、コメント

2　実施上の留意点

(1) 教育課程に位置付けた正規の授業（土曜日半日）とする。

(2) 地域の保護者、大学生、退職教員、民間企業等の人材を効果的に活用する。

(3) 月２回の実施を目標とする。

各市町村（学校組合）教育委員会及び各学校が家庭・地域と連携した土曜授業の取組を推進していけば、学ぶ意欲を育み、確かな学力を育成することができます。

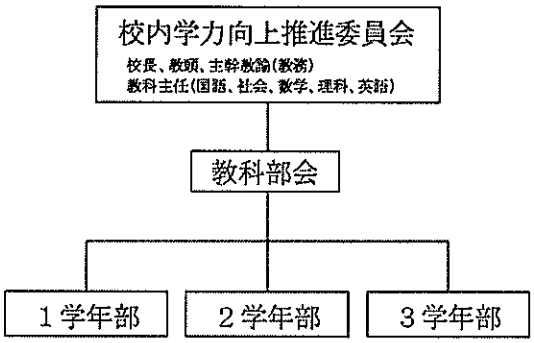
放課後の補充学習や土曜日、長期休業中における取組
－放課後における補充学習の取組の実際－

直方市教育委員会（植木中学校）

■　取組のねらい

教科の補充学習や生徒同士の教え合い活動、家庭学習の工夫により、学力向上を目指す。

■　取組の組織



【校内学力向上推進委員会】
・学力課題の分析　・取組の方針決定
・取組計画の立案　・取組の改善指導

【教科部会】
・取組の内容検討　・学習問題の準備

【学年部】
・補充学習の指導　・実施状況の把握
・家庭学習との連携指導

■　取組の年間計画

校内学力向上推進委員会では、２、３年生は定期考査や到達度テストの結果、１年生は小中一貫教育における学力向上部会において小学校の６年時の学力状況を把握し、それぞれの学力課題を分析した結果に基づき、補充学習（トライタイム）の方針と取組計画を決定している。

また、６月に基礎的な学習内容についての予備調査のためのテストを行い、１月に同等の内容での学力定着の確認テストによって、取組の評価を行っている。（本年度は数学で検証）

４月	各学年の学力分析、計画立案 トライタイム開始
６月	基礎内容の定着状況確認テスト
９月～12月	学力実態に応じた重点教科指定（重点教科の回数は30%増）
１月	基礎内容の定着状況確認テスト
３月	次年度の計画案作成

■　取組の工夫点

１　トライタイムとトライアルウィーク・トライタイムにおける補充学習

２　家庭学習の手引きや家庭学習ノート（Ｕノート）を利用した、補充学習、家庭学習による連携指導

■　取組の実際

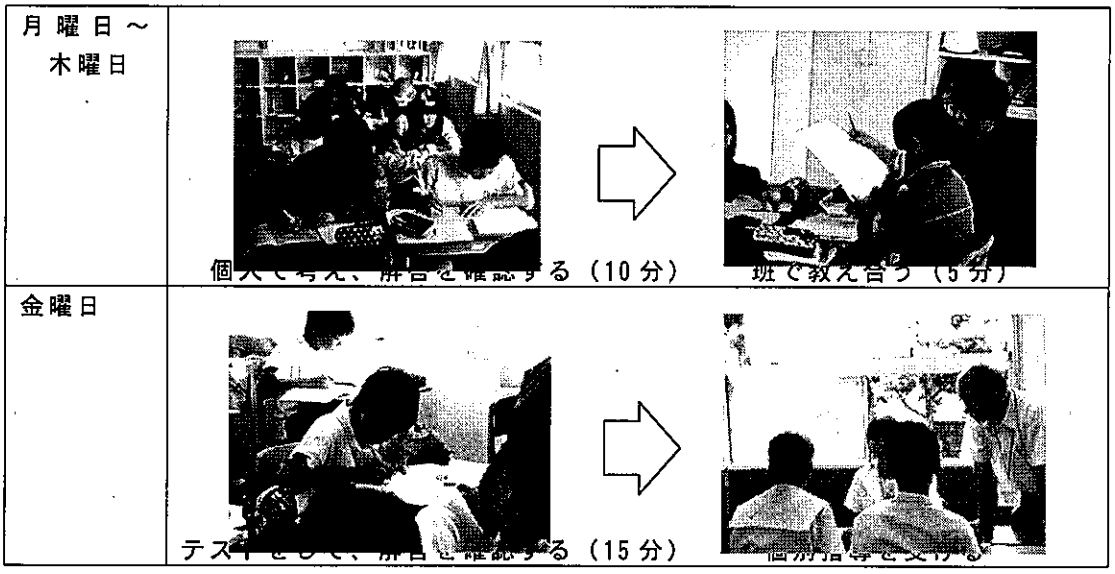
１　トライタイムとトライアルウィーク・トライタイムにおける補充学習

(1)　１週間を１サイクルとしたトライタイム

トライタイムでは月曜日から木曜日までの学習定着度を確認するために、金曜日にテストを行っている。また、各クラスには原則として複数の教員がおり、金曜日のテストの結果により、定着度の低い生徒に対して個別の指導にあたっている。

「教え合い活動」は、ただ単に答えを書き写すのではなく、「わからない人はわかるまで質問し続けることができ、わかる人は丁寧に教えることによって、より自分の理解を深めることができるための活動」と定義している。つまり、トライ

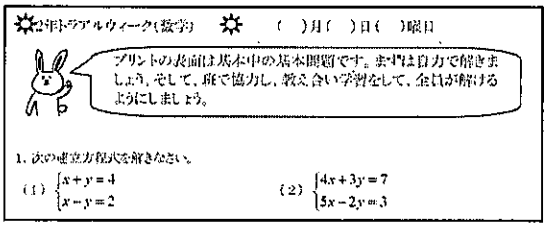
タイムにより学習効果をあげるためには、基盤となる人間関係づくりが重要である。学年部では教え合い活動が円滑に行えるために、班編制のポイントを協議し、活動が徹底して行えるよう、班全員が全問正解を目指せるような工夫した取組をしている。(資料１)



資料１　１週間を１サイクルとしたトライタイム

(2) 基礎事項を繰り返し学習するトライアルウィーク・トライタイム

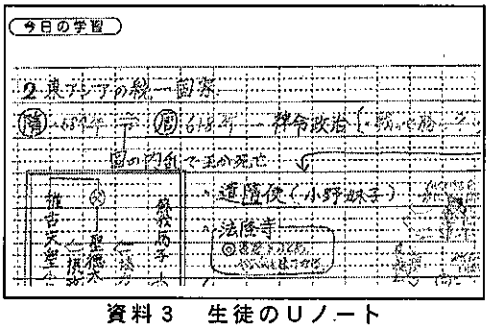
定期考査の１週間前に設定する30分間の補充学習である。この時間では、定期考査の範囲にある基礎事項（例えば漢字、英単語、計算問題など）を繰り返し学習できるように学習課題を準備している。(資料２)



資料２　トライアルウィークの課題例

(3) 家庭学習の手引きや家庭学習ノート（Ｕノート）を利用した、補充学習と家庭学習による連携指導

家庭学習の取組として、予習と復習を家庭学習ノート(Ｕノート)にするように指導している。(資料３)特に復習においては、トライタイムで学習したことをさらに定着できるようにするために、宿題として学習プリントを準備して取り組ませている。



資料３　生徒のＵノート

■　取組の成果と課題

【成果】

○　基礎的基本的な内容の繰り返しの補充学習により、全国調査Ａ問題をはじめとする各種学力調査において全学年の平均点の向上が認められた。

学力・学習状況調査 県標準比	H23	H24	H25
国語Ａ	98.4	98.5	103.4
数学Ａ	95.8	95.9	101.0

学習定着度テスト 県標準比(2学期末)	国語	数学	英語
２年	104.8	113.9	98.5
３年	112.2	99.3	95.1

トライタイム数学	(事前→事後) 平均点		
1年生	71.4	→	76.5
2年生	61.9	→	67.6
3年生	69.3	→	77.1

【課題】

●　学習内容の難易度が高くなると学力格差が広がる傾向があり、それがトライアルウィーク等の取り組み方の差として表れている。

放課後の補充学習や土曜日、長期休業中における取組
－夏休みにおける算数強化講座（「算数道場」）の取組－

桂川町教育委員会（桂川小学校）

■　取組のねらい

夏季休業中の５日間、第５学年児童を対象として、習熟度別に４分割し、全職員で指導することを通して、算数科における基礎的・基本的な学力を身につけることができるようにし、児童が本来もっている可能性をより伸ばす。

■　取組の組織

第５学年の参加希望児童を下表のように習熟度別にクラス分けし、全職員が４つのグループに分かれ指導した。

クラス	人数（９４名）	担当
A	２７名	１年担任・指導方法工夫改善教員（高学年担当）
B	２３名	６年担任・指導方法工夫改善教員（低学年担当）
C	３１名	２・３年担任・補助教諭
D	１３名	４・５年担任・児童支援加配・特学担任２名・教務主任・町特別支援員

不参加　７名

■　取組の計画

日時	取組内容	
６月	計画案提案	ねらい、クラス分け、役割分担等を確認
	児童への説明	各担任が「算数道場」の概要を説明
	保護者への連絡①	保護者向けの文書を配布し参加を促進
	参加集約	申し込み票を担任へ提出
７月	保護者への連絡②	懇談会や家庭訪問で再度参加を促進
	指導内容・方法等の確認	終業式後の職員会議で、詳細の案を指導方法工夫改善教員が提案
算数道場　７月２２日（月）～２６日（金）　５日間		
７月２２日	プレテスト	指導方法工夫改善教員が問題を作成
７月２６日	修了検定	指導方法工夫改善教員が問題を作成
９月	確認テスト	指導方法工夫改善教員が問題を作成

■　取組の工夫点

- 全職員による習熟度別４分割の指導を行う。その際、課題に応じた学習プリントを準備する。
- 町内の公共施設（桂川町住民センター）を活用する。
- プレテスト、修了検定、９月の確認テスト結果を分析する。

■　取組の実際

○　習熟度別の分割にあたっては、ＣＲＴ検査の結果を基準にしつつ、日常の学習状況を加味して４つのクラスに分割した。指導にあたっては、指導方法工夫改善教員が「教え込まずに考えさせ

る」という基本方針を提案し、全職員の共通理解を図った。学習プリントは、指導方法工夫改善教員が習熟の程度に応じて４種類作成した。

詳細については、下表の通りである。

ｸﾗｽ	学習の様子	○学習内容　・学習方法　※指導上の留意点
A		○　５年生１学期の算数科の内容を中心に、思考を要する問題（Ｂ問題） ・自分で考え、自分で解く。 ※誤答の原因を考えさせる。 ※正解に導くヒント（キーワード、説明の型）を提示する。
B		○　５年生１学期の算数科の内容を中心に思考を要する易しい問題(Ｂ問題) ・自分で考え、自分で解く。 ※誤答の原因を考えさせる。 ※正解に導くヒント（キーワード、説明の型）を提示する。
C		○　５年生１学期の算数科の内容を中心に、基礎・基本の問題 ・基本的には自分で考え自分で解くが、分からないところは教師に質問する ※適宜説明し、内容を理解させる。 ※スピードは求めない。
D		○　前学年までの「数と計算」領域を中心とした基本・基本の問題 ・基本的には自分で考える。 ※マンツーマンの個別指導を行う。 ※習熟の程度に応じて、教えること・考えさせることのバランスに配慮する。

○　桂川町住民センターを会場とした。児童は、快適な環境で学習できることを非常に喜んでおり、集中して学習に取り組むことができた。

○　プレテスト、修了検定、確認テストの結果を分析し、全職員による校内研修を行った。分析結果を２学期の第５学年算数科の習熟度別４分割指導に活かしている。

■　取組の成果と課題

【成果】

○　プレテストと修了検定を比較すると、Ａ～Ｄすべてのクラスで伸びが見られた。

	A	B	C	D	平均
プレテスト	90	79	67	55	72
修了検定	96	89	77	65	81
確認テスト	91	84	63	53	73

○　全職員が指導にあたったため、きめ細かい丁寧な指導が可能になり、児童は「わかる、できるよろこび」を味わうことができた。

○　全職員が算数科学習指導における桂川小学校の全体的な課題を共有し、算数科学習指導における系統の重要性を再確認した。特に、指導した５年生のつまずきから、担当する学年の指導の重点を見出すことができた。

○　夏季休業中の「算数道場」の効果を児童・保護者、職員が認識し、学力向上への意識が高まっており、学校文化として定着しつつある。

【課題】

●　修了検定と確認テストを比較すると、結果が低下しており、学習内容の定着に課題が見られる。習熟に時間を要する児童の結果の低下が顕著であり、手立てを再考しなければならない。特に、具体的に操作する算数的活動を取り入れたり、習熟度別の人数を調整したりする必要がある。

●　Ｂ問題を実際に解く校内研修（本年度は９月実施）を１学期に行い、指導の具体的なポイントを共通理解した上で、「算数道場」の指導にあたるようにするとさらに効果的である。

学習習慣形成のための家庭学習の指導

学習習慣形成のための家庭学習の指導

■　本県における児童生徒の家庭学習の状況

全国学力・学習状況調査の結果から、平日に１時間以上、家庭学習を行っている児童生徒の割合は、平成１９年度に比べ、小・中学校ともにやや増加しています。一方、平日全く家庭学習を行っていない児童生徒の割合についても、小・中学校でやや減少しています。

児童生徒の平日の家庭学習時間

	小学校		中学校	
	１時間以上	全くしない	１時間以上	全くしない
H25	62.2%	3.3%	62.8%	8.0%
H19	53.9%	4.6%	60.4%	12.3%

（全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」）

また、家庭学習の内容として、学力向上に効果的と考えられる「授業の予習・復習」を行っている児童生徒の割合については、小・中学校ともに半数に満たない状況にあります。

家庭学習の内容

	小学校	中学校
授業の復習	47.3%	45.3%
授業の予習	37.2%	28.7%

（H25全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」）

■　各学校における家庭学習の指導について

家庭学習の指導にあたっては、家庭学習時間や家庭学習の手順の指導だけでなく、本単元で習得した基礎的・基本的な知識・技能のより確実な定着を図ったり、次の単元における知識・技能の習得に必要となる既習の知識・技能の想起を図ったりするなど、家庭学習の内容と日常の授業の内容との関連を持たせることが大切です。

家庭学習の指導のポイント

ポイント1

○　家庭学習と授業との関連をもたせましょう。

・　家庭学習の指導にあたっては、「本単元の学習内容の復習」や「次の単元における知識・技能の習得に必要となる既習事項の復習」など、授業の復習を重視し、日常の授業との関連をもたせることが大切です。

家庭学習と日常の授業との関連の例

【本単元の学習内容の復習】

＜授業＞
【学習内容】
（例）小学校第3学年
「たし算とひき算の筆算」
・十の位と百の位に繰り下がり（2回）がある筆算の仕方の学習

→

＜家庭学習＞
【家庭学習課題】
（例）・繰り下がりが1回の筆算練習（繰り下がり）につまずきがあれば復習問題）
・繰り下がりが2回の筆算練習

→

＜授業＞
【学習内容】
（例）・十の位が空位の場合の筆算の仕方の学習

【次の単元における知識・技能の習得に必要となる既習事項の復習】

＜家庭学習＞
【家庭学習課題】
（例）・三角形、四角形等の面積、直方体、立方体の体積の求積の練習

→

＜授業＞
【学習内容】
（例）第6学年
「立体の体積」
・四角柱、三角柱等角柱の体積の求積

ポイント2

○　児童生徒の実態に応じ、個別の課題を克服する家庭学習を行わせましょう。

・　家庭学習が児童生徒にとって主体的なものとなるためには、児童生徒自ら家庭学習の計画を立てて行わせるようにすることが大切です。その際、学年・学級としての共通の課題だけでなく、自らの弱点克服を図るための個別の課題に基づく学習内容を計画的に行わせます。
・　個別の課題の提示にあたっては、単元内での形成的評価、単元のテスト、学期末テスト等を基に、児童生徒一人一人の学習実態を明確にし、特に定着が必要と考えられる内容を重点化することが大切です。

※　ふくおか学力向上 Web システムに県が作成した家庭学習の手引があります。参考にしてください。

自主学習や学習習慣形成のための家庭学習の指導（小学校）

志免町教育委員会（志免中央小学校）

■　取組のねらい

○　子どもの家庭学習への主体的な取組や目的のある家庭学習を設定し意欲的に取り組む姿を目指す。
○　スリーアップ運動（「授業」「家庭学習」「補充学習」）を通して授業と家庭学習との一体化を図る。

■　取組の組織

学力向上プロジェクト部会を中心とした取組組織の確立

学校長 → 学力向上プロジェクト部会 → 全教職員
↑ 教頭　↑ 主幹教諭

○教頭；内容の指導助言
○主幹教諭；内容の具体的検討と日程の調整
○学力向上プロジェクト部会；協議・決定。全職員への提案

■　取組の年間計画

○　年間を見通した取組の作成

4月上旬	研究構想の提案及び学力向上ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部会の設置
4月下旬	学力向上ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部会を中心に家庭学習の取組の検討、全職員へ提案
5月上旬	全校朝礼にて児童への家庭学習についての説明、実施
7月上旬	学力向上ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部会で成果と課題を協議、改善策検討
夏季休業中	他校の家庭学習での予習についての講話を拝聴
10，11月	復習月間の取組（家庭学習にて復習ﾌﾟﾘﾝﾄを出題）
12月上旬	学力向上ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部会で成果と課題を協議、改善策検討
2月下旬	本年度の成果と課題の協議
3月中旬	来年度の取組について協議

■　取組の工夫点

(1)　復習月間（10月、11月）を設定し、前期の復習を家庭学習で行い、その補講を朝の活動で行うこと
(2)　機能的に出す家庭学習から脱却し、授業と連携した予習を奨励すること
(3)　ドリル類の家庭学習や反復練習の家庭学習から自主的な家庭学習に取り組むこと

■　取組の実際

(1)　復習月間（10月、11月）を設定し、前期の復習を家庭学習で行い、その補講を朝の活動で行うこと

この取組の提案は、学力向上ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部会にも所属している研究主任が行った。（資料１）
月、水曜日に算数科の復習問題ﾌﾟﾘﾝﾄを家庭学習として出題する。
翌日、その問題に苦手意識を感じた児童は朝活動の時間（8:40～8:55）に少人数指導教師が担当する補講を受講する。（資料２）
そうではない児童には、学級担任教師が別の復習問題プリントを出題する。
復習問題プリントは、東京書籍の問題データベースから引用した。

資料２　少人数指導の様子

『「分からない」を「分かる」へ　10月，11月復習月間』の実施について
研修部　○○　○○

1　目　標
ア　算数科，理科において4月～10月までの学習内容の復習を10月，11月に行い，「分からない」を「分かる」へ変える。
イ　「のびる子さん」が一人でも少なくなるように復習を行う。
2　期　間
10月2日（水）～11月29日（金）
3　対　象
3学年から6学年　算数，理科
4　昨年度実施からの課題
ア　11月の1か月間の実施であったが復習宿題プリントが毎日だったため、今必要なクラスの宿題が出せなかった。
イ　復習宿題プリントをしただけで終わり、分からなかった児童への支援ができなかった。

資料１　10月，11月復習月間の実施について

(2)　授業と連携した予習を奨励すること

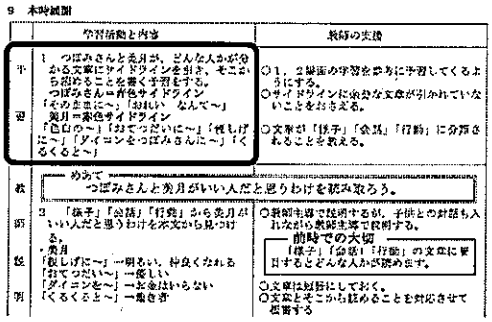
市川伸一先生の理論である「教えて考えさせる授業づくり」に則って、研究授業を行う。その理論では，先行学習である予習を行い、授業への構えをつくることを目的としている。右記のように指導案の中に「予習」の内容を記すようにした。（資料３）

資料４は、実際に児童の予習したプリントの内容である。その内容は、めあてにあたる叙述に赤シールを貼り、その叙述に着眼した理由を下欄に書く、という予習である。

この予習の仕方には、次のようなｽﾃｯﾌﾟを設けている。

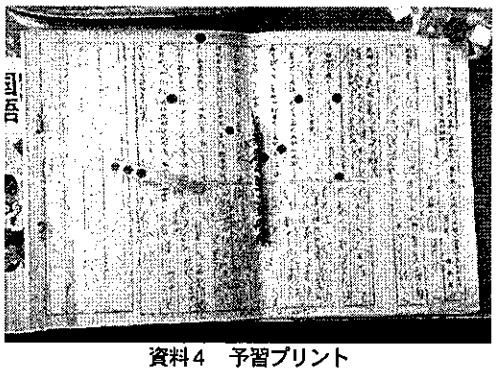
めあてを予告する。
ｽﾃｯﾌﾟ１　視写や音読
ｽﾃｯﾌﾟ２　難解語句の意味調べ
ｽﾃｯﾌﾟ３　学習プリントにｻｲﾄﾞﾗｲﾝやシールを貼る。
ｽﾃｯﾌﾟ４　学習プリントに自分の考えを書き込む。

この予習した内容から授業の導入が始まるようにしている。４月当初は、ｽﾃｯﾌﾟ１，２までだったが、11月の時点では、１年生でもｽﾃｯﾌﾟ４まで行えるようになっている。この予習は、算数科でも実施した。内容は、問題文を写したり、教科書の[1]の問題を自分で解いたりなどである。


9　本時展開

	学習活動と内容	教師の支援
予習	1．つぼみさんと美月が、どんな人かが分かる文章にサイドラインを引き、そこから読めることを書く予習をする。 つぼみさん＝青色サイドライン 「そのとき に～」「はれい なんで～」 美月＝黄色サイドライン 「色白の～」「おてつだいに～」「優しげに～」「ダイコンを つぼみさんに～」「くるくると～」	○1，2場面の学習を参考に予習してくるようにする。 ○サイドラインに余分な文章が引かれていないことをおさえる。 ○文章が「様子」「会話」「行動」に分類されることを教える。
教師の発問	めあて つぼみさんと美月がいい人だと思うわけを読み取ろう。 2．「様子」「会話」「行動」から美月がいい人だと思うわけを本文から見つける。 ・美月 「優しげに～」→明るい、仲良くなれる 「おてつだい～」→優しい 「ダイコンを～」→お金はいらない 「くるくると～」→働き者	○教師主導で説明するが、子供との対話も入れながら教師主導で説明する。 前時での大切 「様子」「会話」「行動」の文章に着目するとどんな人かが読めるよ。 ○文章は板書にしておく。 ○文章とそこから読めることを対応させて板書する

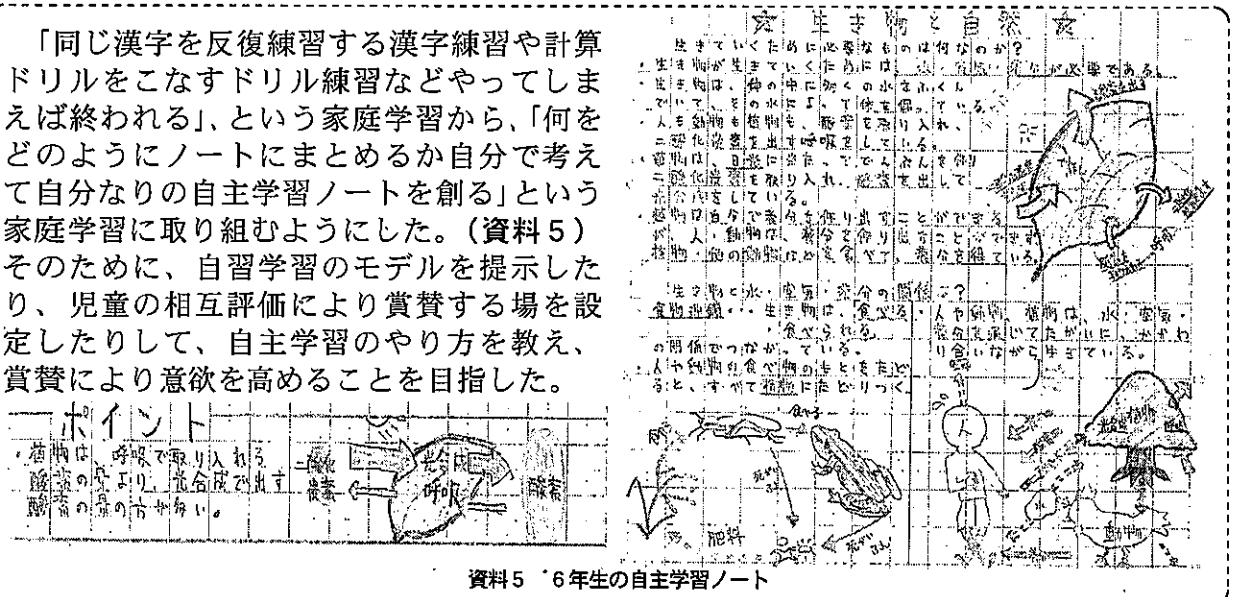
資料３　「予習」の内容を少人数指導の様子



資料４　予習プリント

(3)　ドリル類の家庭学習や反復練習の家庭学習から自主的な家庭学習に取り組むこと

「同じ漢字を反復練習する漢字練習や計算ドリルをこなすドリル練習などやってしまえば終われる」、という家庭学習から、「何をどのようにノートにまとめるか自分で考えて自分なりの自主学習ノートを創る」という家庭学習に取り組むようにした。（資料５）そのために、自習学習のモデルを提示したり、児童の相互評価により賞賛する場を設定したりして、自主学習のやり方を教え、賞賛により意欲を高めることを目指した。



資料５　６年生の自主学習ノート

■　取組の成果と課題

【成果】

○　復習月間を設定したことにより、家庭学習でそれまでの学習内容を自分で復習することができた。

○　予習をしておかないと授業についていけない、授業と関係のある家庭学習なので大切だ、といったように家庭学習と授業がつながることで、家庭学習をする価値が子ども達にも分かったようである。その結果、予習して授業を受けるという流れが身に付いてきている。

○　自主学習により、やらされている家庭学習ではなく自分の考えで進める家庭学習という意識が高まり主体性が生まれてきた。

【課題】

●　児童によって自主学習や予習の量に差があるので、その是正が必要であること。

自主学習や小中連携等による家庭学習の指導（中学校）

久留米市教育委員会（筑邦西中学校・安武小学校・大善寺小学校）

■　取組のねらい

本市における全国学力・学習状況調査の平均正答率及び市学力実態調査における得点率と到達度は全国平均値をやや下回っているのが現状である。その要因の１つとして、家庭学習習慣が十分に形成されていないことが考えられている。

平成23年度全国学力・学習状況調査で実施したアンケートの結果によれば、平日授業以外にほとんど勉強しないと回答した小学校６年生5.5％、中学校３年生7.8％でいずれも全国平均値を上回っている。

そこで、授業改善とともに児童生徒に家庭学習習慣を形成させる取組を推進することで本市（本推進校区）の学力向上を目指した。

■　取組の組織

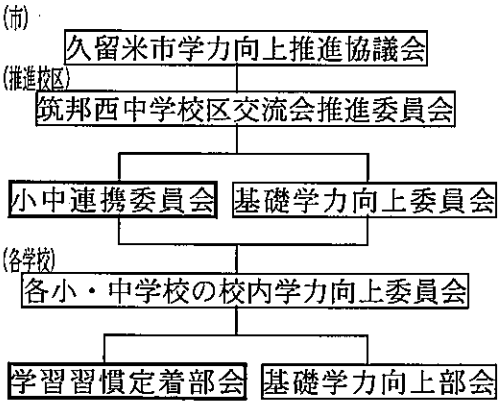
１　久留米市の組織

久留米市学力向上推進協議会（学識経験者、推進校区校長会代表、保護者代表、地域代表、小・中学校長会代表、教育事務所、市教委事務局から構成）を設置し、推進校区の報告を受け、指導助言を行うとともに、市内各学校への取組の拡大を行っている。

２　推進校区（筑邦西中学校区）の組織

推進校区として指定された筑邦西中学校区は、筑邦西中学校区交流会推進委員会内に設置した小中連携委員会と基礎学力向上委員会で小・中学校が連携しながら取組の方向・内容・方法を確認し、それを受けて各学校の学力向上委員会とそれぞれの部会で事業の推進を行っている。特に、学習習慣形成には、小中連携委員会と校内の学習習慣定着部会が担当している。

【筑邦西中学校区学力向上組織図】



■　取組の年間計画

【年間実施計画】（主な学習習慣に関するもののみ）

月	取組内容（筑：筑邦西中、安：安武小、大：大善寺小）
4	筑：「家庭学習の手引き」の配布、「毎日の生活・学習ノート」の配布（１年生） 大：「家庭学習のポイント」、「家庭学習の進め方」の児童への説明・指導、家庭訪問での配布、説明
5	安：「家庭学習の手引き」の配布とPTA総会での事業説明
6	筑・大：家庭学習習慣、学力向上に関する校内研修 大：第１回家庭学習強化週間の実施
7	筑：「家庭学習の手引き」利用状況の把握と家庭向けリーフレットの作成配布 大：夏季休業中の学習についての懇談会、保護者啓発だよりの配布、取組の成果と課題検討
8	筑：学力向上校内研修会の実施、学習アンケートの作成、２学期版「家庭学習の手引き」の検討 安・大：家庭学習の取組改善策の検討
9	筑・安：学力向上校内研修会の実施
11	３校：久留米市版「全国学力調査の結果のお知らせ」保護者用チラシの配布と学校だよりによる保護者啓発 ３校：各部会からの報告、学力向上リーフレットの内容検討　大：第２回家庭学習強化週間の実施
12	大：家庭学習をテーマにした懇談会の実施
1	安・大：家庭学習に関するアンケート　大：大善寺小版「家庭学習の手引き」の配布 ３校：各部会の活動状況の総括、学力向上リーフレットの内容検討
2	大：第３回家庭学習強化週間の実施 ３校：久留米市版「久留米市学力調査の結果のお知らせ」保護者用チラシの配布と学校だよりによる保護者啓発、ふくおか学力アップ推進事業リーフレット配布及び学力実態調査結果活用研修会における実践発表
3	３校：取組のまとめ

■　取組の工夫点

1　学校間の連携
2　家庭学習の方法・内容の具体化
3　保護者の家庭学習への意識改善

■　取組の実際

1　学校間の連携の取組

昨年度に引き続き、筑邦西中学校区共通の「家庭学習の手引き」を３校の全児童生徒及び保護者に配布するとともに、ＰＴＡ総会、保護者会、家庭訪問等あらゆる機会に家庭学習の重要性を啓発し、児童生徒への指導を行った（資料１）。

2　家庭学習の方法・内容を具体化する取組

①　小学校

各学校の実態及び発達段階を考慮し、各小学校では低・中・高学年に対応した取組を実施した。

大善寺小学校では、「一人勉強のすすめ」を低・中・高学年向けにそれぞれに作成し、学年ごとに具体的な教科ごとの学習内容・方法を児童・保護者に示した（資料２）。

また、安武小学校では、自ら学ぶ態度を身につけられるように、辞書引き学習に取り組んだ（資料３）。

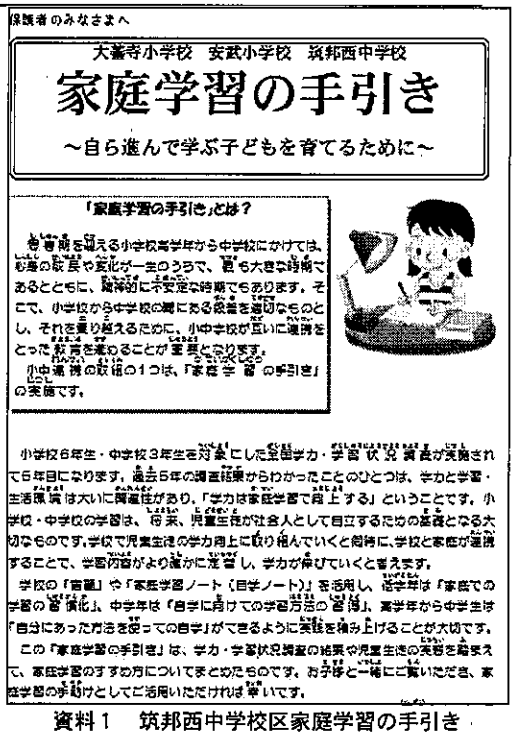
まず、身の回りのことをきっかけに調べ、次にテーマを与えて調べ、さらに体験と結びつけて調べる場面を設定し、「何でもノート」に記録する取組を行った。

②　筑邦西中学校

中学校では、授業の学習内容と家庭学習の連動をねらいとして、教科だよりを発行し、効果的な学習内容や方法を提示した。また、学生や地域ボランティアを活用して放課後学習会を行い、そこでの学習の続きを家庭で行うなど、家庭学習へとつなぐ取組を行った。

3　保護者の家庭学習への意識改善を図る取組

「家庭学習の手引き」の配布・説明による保護者への啓発に加えて、大善寺小学校では、「一人勉強のすすめ」を配布し、具体的な内容や時間等についてお願いをした上で、６月と11月、２月に家庭学習強化週間を設定した。その際、「家庭学習がんばりカード」を配布し、１週間の毎日の取組を児童に記入させるとともに、保護者のコメント欄を設けることで、保護者が子どもの学習内容を把握したり、がんばりに気付いたりすることができた。また、取組については集約した結果を保護者に配布することで、保護者の家庭学習に対する意識を高めることができた。


保護者のみなさまへ

大善寺小学校　安武小学校　筑邦西中学校

家庭学習の手引き

～自ら進んで学ぶ子どもを育てるために～

「家庭学習の手引き」とは？

思春期を迎える小学校高学年から中学校にかけては、心身の成長や変化が一生のうちで、最も大きな時期であるとともに、精神的に不安定な時期でもあります。そこで、小学校から中学校の間にある段差を適切なものとし、それを乗り越えるために、小中学校が互いに連携をとった教育を進めることが重要となります。

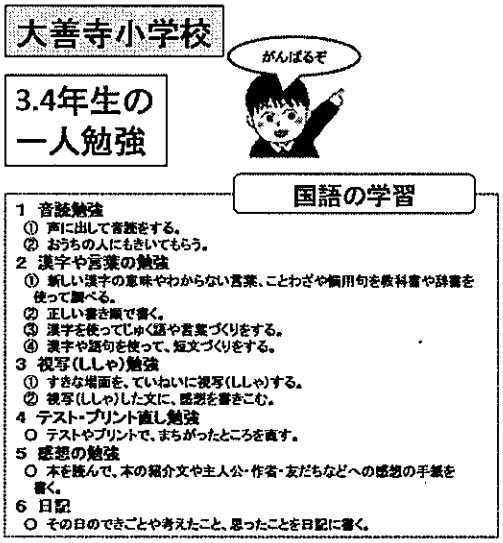
小中連携の取組の１つは、「家庭学習の手引き」の実施です。

小学校６年生・中学校３年生を対象にした全国学力・学習状況調査が実施されて５年目になります。過去５年の調査結果からわかったことのひとつは、学力と学習・生活環境は大いに関連性があり、「学力は家庭学習で向上する」ということです。小学校・中学校の学習は、将来、児童生徒が社会人として自立するための基礎となる大切なものです。学校で児童生徒の学力向上に取り組んでいくと同時に、学校と家庭が連携することで、学習内容がより確かに定着し、学力が伸びていくと考えます。

学校の「言葉」や「家庭学習ノート（自学ノート）」を活用し、低学年は「家庭での学習の習慣化」、中学年は「自学に向けての学習方法の習得」、高学年から中学生は「自分にあった方法を使っての自学」ができるように実践を積み上げることが大切です。

この「家庭学習の手引き」は、学力・学習状況調査の結果や児童生徒の実態を考慮えて、家庭学習のすすめ方についてまとめたものです。お子様と一緒にご覧いただき、家庭学習の手助けとしてご活用いただければ幸いです。

資料１　筑邦西中学校区家庭学習の手引き


大善寺小学校

3.4年生の一人勉強

がんばるぞ

国語の学習

1 音読勉強
① 声に出して音読をする。
② おうちの人にもきいてもらう。
2 漢字や言葉の勉強
① 新しい漢字の意味やわからない言葉、ことわざや慣用句を教科書や辞書を使って調べる。
② 正しい書き順で書く。
③ 漢字を使ってじゅく語や言葉づくりをする。
④ 漢字や語句を使って、短文づくりをする。
3 視写(ししゃ)勉強
① すきな場面を、ていねいに視写(ししゃ)する。
② 視写(ししゃ)した文に、感想を書きこむ。
4 テスト・プリント直し勉強
○ テストやプリントで、まちがったところを直す。
5 感想の勉強
○ 本を読んで、本の紹介文や主人公・作者・友だちなどへの感想の手紙を書く。
6 日記
○ その日のできごとや考えたこと、思ったことを日記に書く。

資料２　大善寺小学校　一人勉強のすすめ［３・４年生版］（一部抜粋）

■　取組の成果と課題

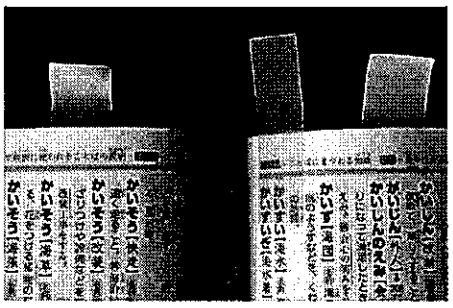
【成果】

○　平日に家庭でまったく学習しないと回答する児童・生徒が市平均で、小学校６年3.6％、中学校３年7.3％に減少し、学習時間に改善が見られた（H25年全国学力・学習状況調査）。

【課題】

●　授業での学習内容と家庭学習の効果的な連動（適切な量と質の課題の提示）。

●　１年間や３年間、６年間、９年間を見据えた自主学習の内容や方法の構築。



資料３　安武小　辞書引き学習

平成２５年度ふくおか学力アップ推進事業

■　学力向上推進強化市町村

○　福岡教育事務所管内
　　須恵町、志免町

○　北九州教育事務所管内
　　直方市、小竹町、鞍手町

○　北筑後教育事務所管内
　　久留米市、朝倉市

○　南筑後教育事務所管内
　　広川町

○　筑豊教育事務所管内
　　田川市、飯塚市、福智町、桂川町

○　京築教育事務所管内
　　みやこ町、築上町、上毛町